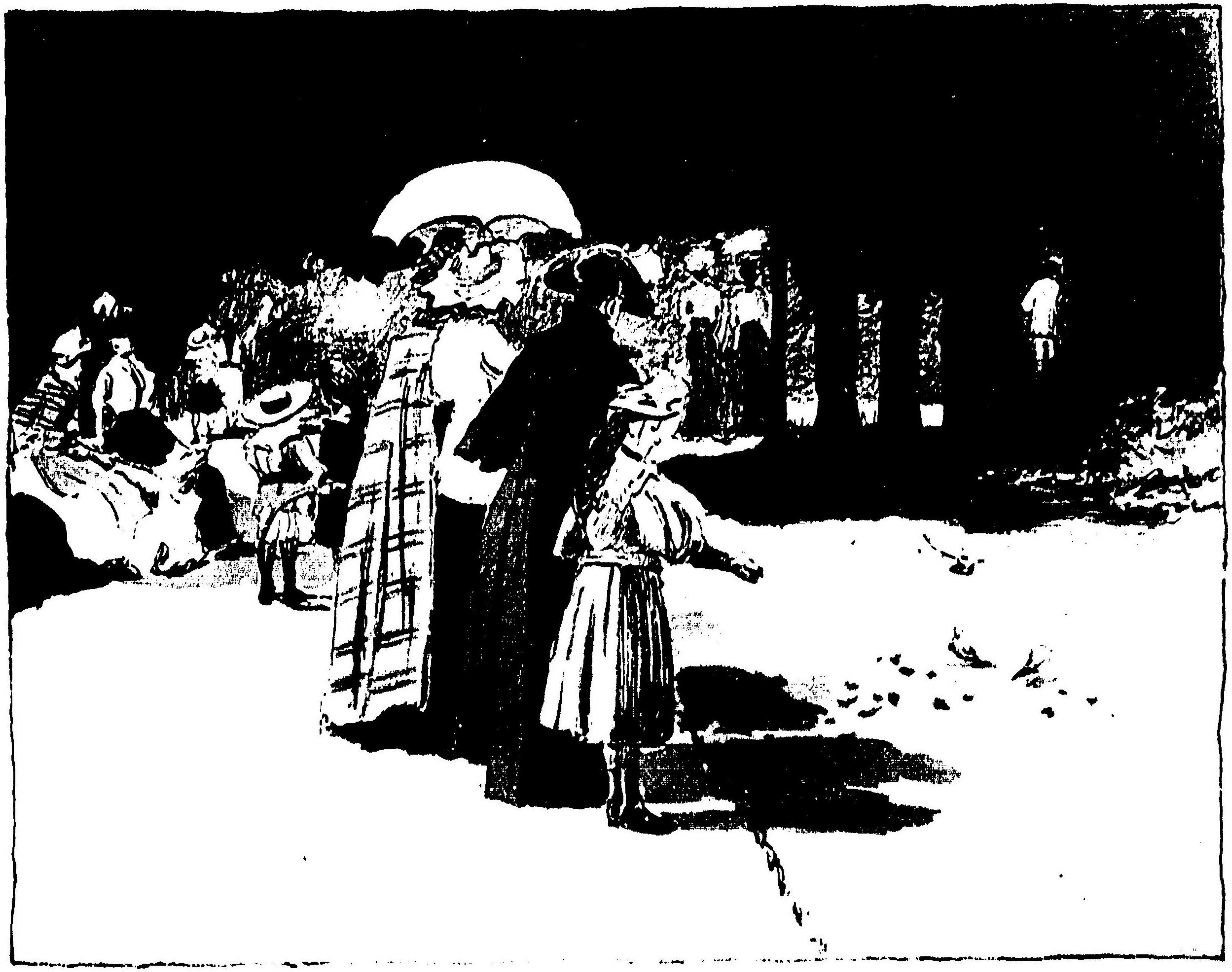
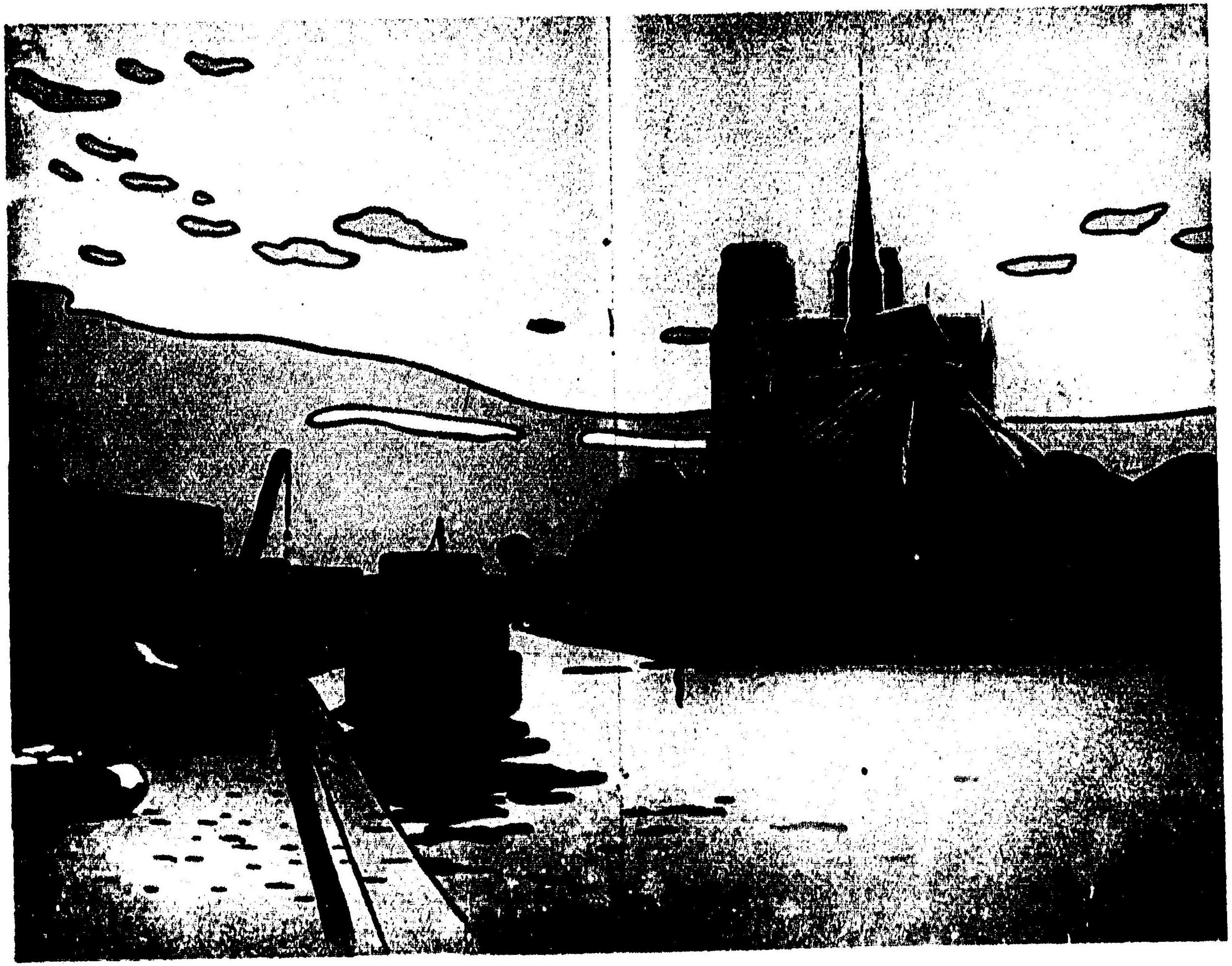
池邊義象著

歐羅巴　全

東京　金港堂書籍株式會社





序

余歐洲に在りて、親しく秩序的文明の進歩を見、竊におもへらく、彼等社會の現狀は、殆ど眞の文明の域に達するに近からんと。試に思へ、大は行政百般の事より、小は日常の私事に至るまで、最も秩序禮讓を貴び、公共道德を重じ、國民の品位を保ち、國家の體面を維持する事に於て、今の世に彼等社會の上に出る國民ある乎。彼の貴族といひ、紳士といふ、いはゆる社會の上流に位するものは、常に國民の模範を以て自ら任じ、その嗜好風儀も下流匹夫の徒とは、おのづからそ

の軌を異にし、その間階級の嚴として犯すべからざるものあるがごとし。

足一たび米國の地に轉ずれば、物質的文明の進歩は驚くべきものありといへども、かれがいはゆる共和平等の弊は、たゞ我が便利をのみ圖らんとする感なくばあらず。例へばその都府のごとき、家屋の建築數十階に達して、天に聳ゆるものもあれば、その傍には、數階にだに達せざる矮屋あり、交通機關の至便なるにかゝはらず、道路の制、その宜きを缺き、兩側の建築宏大なるに對して、路幅の狹隘を感ずるあり。滔々たる社會、唯利のある處に趨り、貧富の度大に隔たり、その極や共和平等を貴びて、反つてその實を失ふ觀無きにあらず。是に於て余は大に惑ひ、一日紐育市に就て、之を質しゝに、果せる哉、行政の機關振はざること久しく、官紀紊亂して、賄賂公行せる、言ふに忍びざるものありき。

世には歐洲の文明は既に死して、米國の文明のみ生々活動せりと說くものあり。豈それ然らんや。そもそも歐米各國互にその基礎異なり、開化の現象また一ならざるは當然の事なれども、行政の機關振はず、官

紀紊亂して、士に公德を論ずるもの少く、秩序禮讓正しからずして、民に廉恥の風なきもの、いかで眞の文明を語ることを得ん。余は歐洲の文明を愛す。殊に我がごとき諸邦に於ては、彼に參酌することの要を認む。君以て如何とす。これを序と爲す。

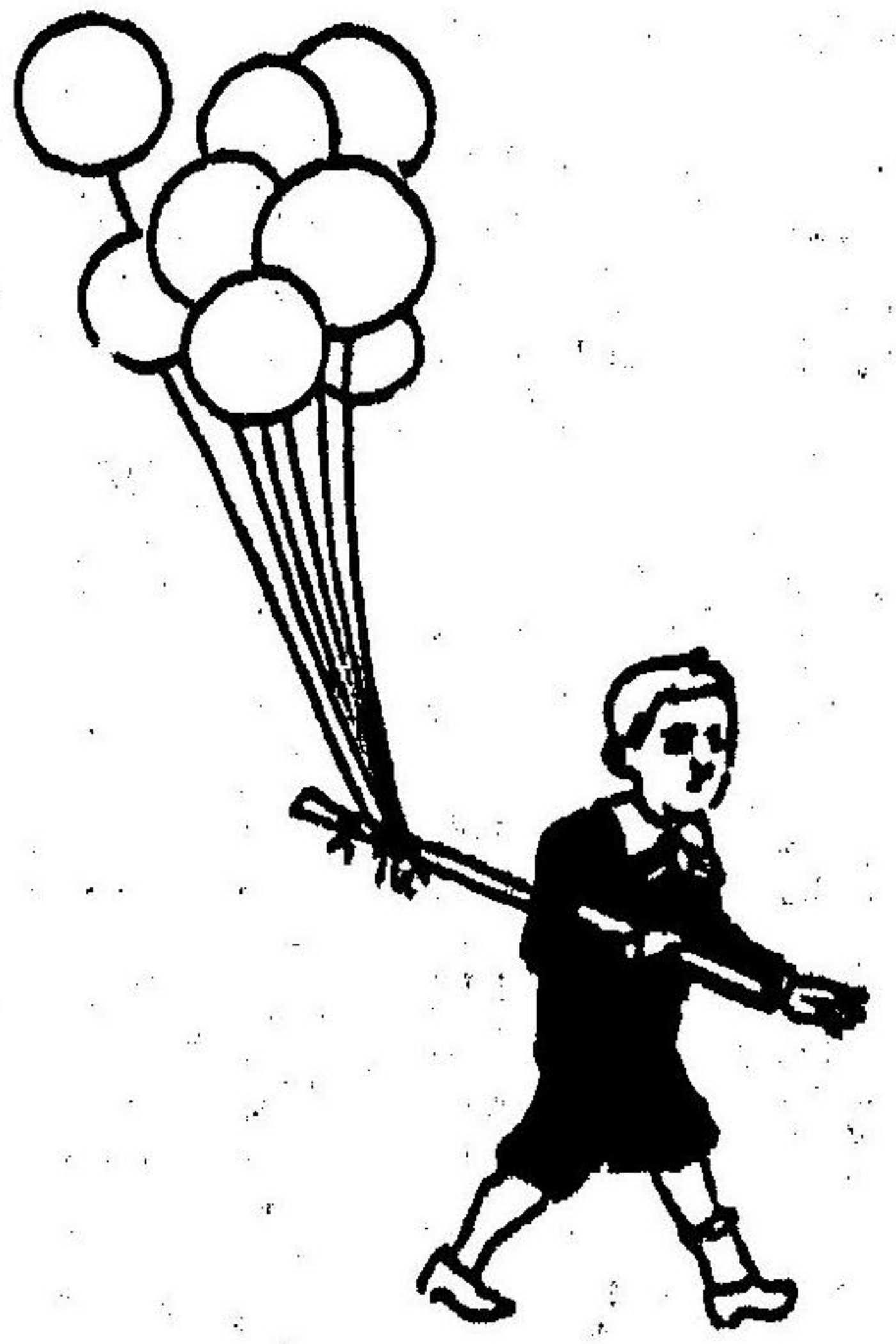
明治三十五年五月

松平正直識

吾友池邊藤園、已以文名家、而猶以爲未足、萬里載筆、游佛京、掇擷人文之精華、耽玩前賢之遺編、既回國、即有佛國風俗問答之編、洛紙爲貴、今又著歐羅巴、徵余序、余本一介庸吏、豈足以輕重其文哉、然曾游佛京、偶與藤園同時、又同作觀風問俗之遊、足跡殆及歐洲全陸、自謂於列國貧富强弱之所係、與治亂興廢之所由、則亦非無所見、而未能發揮其一端、藤園此著、先言吾所欲言、而未能、轉使人增愧赧、嘆才不才之相懸、一至此乎、亦可以知其學之文之深矣、是爲序、

明治三十五年五月

龜井英三郎撰



我友藤園曾て歐洲に遊ぶこと數年、目の睹る所、耳の聽く所、足の蹈む所、身の過ぐる所、悉く收めて紀行に入れ、終に此篇あり、一たび之を繙けば、宇内を尺幅に縮め、坤輿を掌上に運らす可し、藤園の才と筆とを以てするに非ざれば、爭んぞ此に至るを得んや、

然りと雖も、藤園の觀察と筆墨とをして、此細微に入り、此精華を發せしめたるものは、亦君が辛勤刻苦の餘ならずばあらず、追憶すれば、君が始めて巴黎に入りし時、余も亦觀風を賦して此に在り、同好の合する所、同氣の求むる所、與に倶に一屋をトロカデロに租

して、同居せり、當時の藤園は、猶ほ日南がごときのみ、二人の日乘は其痕を掩はず、日南が記に曰く

Vie Actuelle.

Il y a deux mois que mon ami et moi, nous restons à Paris. Chaque matin, nous nous levons à six heures ou à sept heures. Nous prenons un peu de thé et un morceau de pain à huit heures. A midi et à sept heures du soir, nous déjeunons et dînons au restaurant, tantôt au Trocadéro, tantôt à la place de l'Alma.

Comme nous ne parlons pas vite la langue française, nous ne la comprenons pas bien. Il y a trois jours, nous avons voulu manger des sardines. Malheureusement nous avons oublié ce mot sardine. Eh bien, pour nous faire comprendre du garçon, nous avons fait un geste en montrant un petit poisson. Après quelques minutes, il apportait deux plats devant nous. C'était de la cervelle de bœuf, au lieu de sardines. En la mangeant je regardais en face, un regret profond était gravé sur la figure de mon ami. Ah! peut-être, il en était de même de moi. En souriant de cela, j'ai laissé tomber ma fourchette. Telle est notre situation non pas extraordinaire, mais ordinaire.

Après midi, nous prenons nos leçons de Français. quand nous sommes seuls nous deux, nous sommes éloquents et savants. Quand nous paraissons en face de notre professeur, nous devenons tout de suite sourds et muets.

Le soir, en chantant les poèmes de notre pays, nous nous promenons sur le bord de la Seine. A dix heures, nous rentrons chez nous.

藤園も亦之を中古國文體に記して曰く

日南藤園、巴里に來て、二月（ふたつき）を經にけり。朝は常に卯辰の間に起き出でけり。さて紅の茶と麥の粉餅との一きれをなむ飲み食ひける。晝と夜とは、トロカデロ、あるはプラスドラルマの客人（まらうど）待つ家にゆきて饗へしけり。いまだこの國の詞を、能く言ひ、能く聞きわけざりけり。ある日鰯食はんとて、その名忘れにけり。小板に書きたる目録に、それと知らるゝがあれば、指さし教へにければ、御饌つ人うなづきていきけり。うれしきことしてけりと竊によろこ

び待ちぬにけり。程无く二人が前に据ゑられしものは、牛の腦になむありける。一人の顏にははやく惱ましげなる筋ゑがゝれけり。こを見し一人も、また同じ顏ならむと思ふに、苦しくなりて、手にもてる小さじをおとしてけり。二人顏見合ひて笑ひながらさすがに打くひけり。かゝることは、この日のみにはあらざりけり。

盤を過ぐれば、この國ことばの博士入り來にけり。常には二人は物識り人なりけり。能く書きけり、能く語らひけり。されど、博士の前にては、忽ち聾になむかはりける、日にひになむなりにける。

夕になれば、この憤りはらさむとて、セーヌ川邊をさまよひけり。さてさま〴〵の太和歌うたひ、亥の刻ばかりになむ家に歸りける。

當時の生活や斯くの如し、高襟の徒をして之を觀せしめば、其れ之を何とか謂はん、而して數年後の今日、藤園が出しゝ新篇に對すれば、脫帽九拜稽首地に到るを覺えず、嗟乎是れ辛勤刻苦の結果なり、此書を讀む者、以て鑒むべし、我は願ふ此功德を以て普く一切の高襟を濟度せんことを、

無緣寺和尙日南房志

肅啓御來示忝奉存候今回歐米御觀光ニ就キ編述相成候趣別シテ御同遊之榮ヲ得候小生等ニハ往事渺トシテ嗒昔之感ニ不堪候過シ初冬大兄龜井兄及小生ノ三人露國ノ境ニ入リシ砌銅鑼ノ合圖ニ發車致シ候ヲ不案內ナル爲メ同行者相迷ヒ候途端曾テ我國ニ來遊シタリキト云ヘル一露人ニ指導セラレ扨テ彼ノ露人ガ肱ニ「心外無佛法」ノ數字ヲ入墨セルヲ示シ、ニ且ハ異シミ且ハ笑ヒ候ハ前回之壯遊ニ於ケル幕開之一奇事ニ有之候扨テ露ノ二都ニ古今盛衰ノ跡ヲ偲ヒ黑海ニ浮ンデ土耳古ニ入リブルガリ

ヤノ平原ヲ横ギリテ匈牙利、澳他利ニ遊ヒ茲ニ淸水兄ト共ニ四人相携ヘ再ビ轉ジテ伊太利ニ出テ遂ニ畏クモ我ガ天長嘉辰ニ當レル前夜ト覺エ候ニ伊國統一ノ恢業ヲ立テタル現王朝之舊都チユリノーノ都ニ着シ候茲ニ一先ヅ袂ヲ別チテ大兄ト龜井兄トハ佛ニ入ラレ淸水兄及小生ハミランヲ經テ瑞西ヨリ南獨ニ進ミ候同停車場ノ一隅ニ於テ互ニ麥酒ヲ酌ンデ健康ヲ祝スルヤ大兄筆ヲ執リテ

小雨降るトリノの里に旅衣
なれし君にも別れぬるかな

ノ國風一首ヲ詠セラレコレヲ小生ニ示サレシトキハ遠クアルプスノ綠色ヲ望ンデ轉々淒涼ノ感ヲ催シ候是レ同遊分袂ノ辭ナリ小生再ビ伯林ニ歸リ一日感アリ歐洲各國王室ノ盛衰ニ觀テ我ガ皇家ノ隆天壤無窮其懿德ノ深遠ニ其治教ノ休明今更ノ如ク俯仰感慨不能已乃チ一書ヲ裁シテ大兄ニ贈リ候ニ大兄ノ返書又

天地のなしのまに〳〵おのづから
花も紅葉も咲きにほふてふ

ノ一首ヲ以テセラル從是大兄ハ直ニ英ニ渡リテ歸

朝セラレ白雲千里復一鴻ノ來ルナシ則チ此一首ハ在歐中ニ於ケル大兄最後ノ數ナリ何レモ流風馨ルガ如ク飄然掬スヘシ這般ノ歷遊亦再ビ爲シ難シ今ヤ大兄遊志ノ序ヲ請ハルヽニ際シ一言舊懷ヲ叙レタシト存ジ候ヘドモ事匆々ニ出テ筆意ニ任セズ茫然几ニ倚テ推敲致シ候中偶〻在英ノ日嘗テ一讀セルローズベリー卿グラスゴー大學ノ式典ニ臨テ講演セル「帝國ノ經綸」一編ヲ執リ再ビ之ヲ披見致候處着想高遠氣宇亦雄大其編末セキスピヤ祖國ノ詩句ヲ以テシ子弟ヲ勵マシテ言ヘルアリ曰ク我ガ祖國ノ大ヤ亦宇内ニ冠絶セリ然レドモ是レ梵天諸神ノ力ニ頼ラズ又天使鬼物ノ力ニ頼ルニモ非ズ於戯是レ人ノ手ヲ以テ之ヲ成セリ人ノ血ト涙トヲ以テ之ヲ凝結セリト念フニ斯語ハ固ヨリ世人ノ恒言然レドモ巡歐觀光ノ客其民風興敗ノ由テ來ル所以ヲ察シ克ク脚下ニ返照シ先ヅ自カラ感奮興起スル者果シテ幾人カアル大兄常ニ名教ノ事ヲ以テ任ゼラレ予ト歷遊ノ間談往々ニシテ此事ニ及ブ此編亦實ニ茲ニ觀ル所アラントス則チ此語ヲ添ヘ聊カ所思ヲ述ベ以テ序言ニ代ヘ候書不盡意拜復

明治三十五年六月

井上友一

明治三十三年の十月に入り大理石等の愉快さうなる三人道行が羨しく跡追かけてヴィンに出逢ひ夫より伊太利さして落行否火車にて疾走せしが其途中にて鹿數多見かけゝるに不斗春日野を想ひ出して

春日野の鹿をあつむる喇叭哉

伊太利に入りては同行四人ともあはれ啞の豪傑となり果てゝ

紅葉見て秋知られけり啞の旅

やがて河渠四通八達のベニスに着きければ

[illegible]月追て船路のつきぬベニス哉 [illegible]

ベニスを立ちしその翌日羅馬に近くに従ひ有名なる水道の遺片眼に映じけるにより

[illegible]古羅馬の水道白し秋の風 [illegible]

羅馬順禮者の群に交り先づ聖彼得寺に至りて法王を拜し其威嚴の思ひしより高大かるに感じ

中[illegible]法王の宮殿よけて落葉かな [illegible]

羅馬盛時のカラカラ帝王が奢侈を極めし浴趾カラカラ宮に到り其規模の廣大なるに驚き且又古今東西を問はず盛者必滅の理に漏れざるを嘆じ [illegible]

カラカラや蓋も四面に虫の聲 [illegible]

羅馬三日間の見物頃は卄月の末なれど幸に天氣好[illegible]氣候も暖なりければ [illegible]

小春日や馬丁居眠る赤ケット [illegible]

夫よりポムペーに赴き其發掘されたるあとにつきリツトン氏の「ポムペーの寂終日」も思ひあはされて

[illegible]ポムペーの話しに明す長夜かな [illegible]

前途を頻りに急ぎつゝチエノアに到り志士マヂニの墓に詣でゝ [illegible]

こ[illegible]瓜なくや風の身にしむ墓の前 [illegible]

これより現伊太利皇室のおこりたる地トリノに趣く途中汽車より田舍の景を眺めつゝ

[illegible]パン燒の手元に迫る落葉かな

トリノに着きしときは已に日暮れ雨降り出し居りしも勇氣を皷し馬車を驅てガブール紀念碑の下に至り

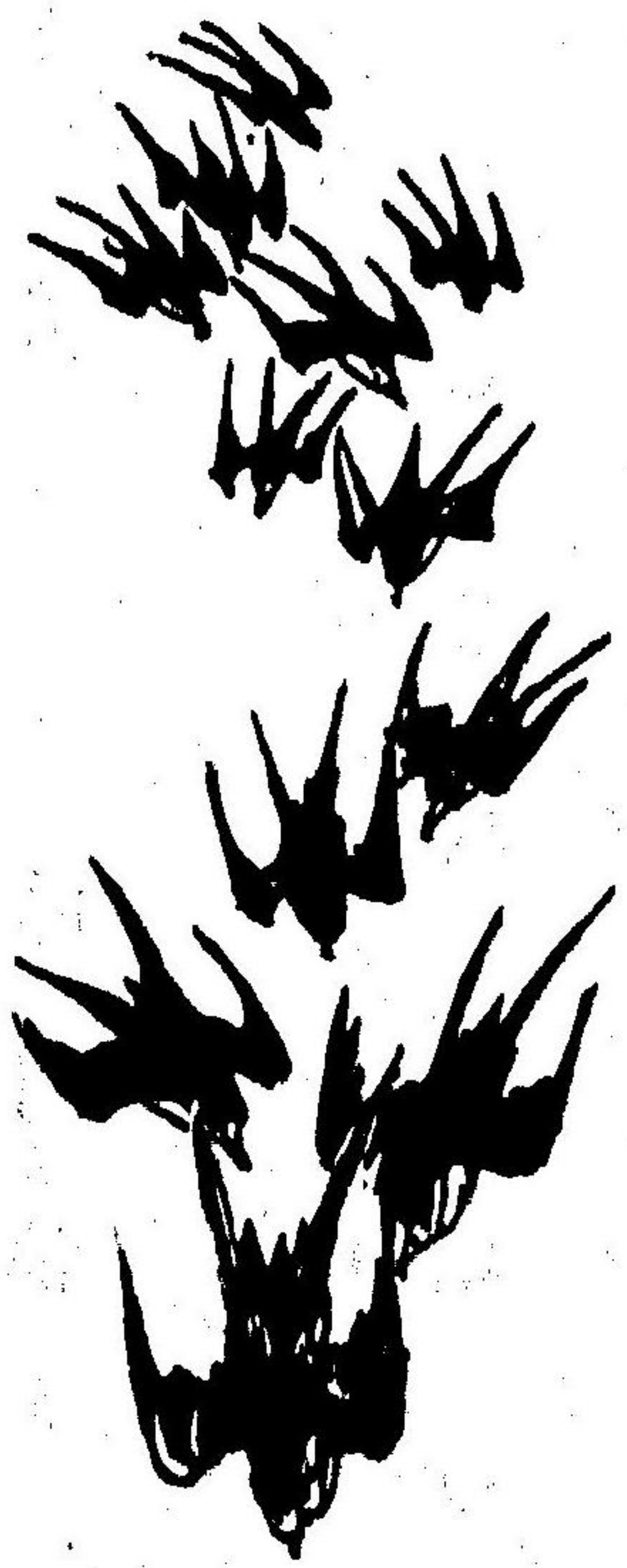
ガブールの像は時雨れぬトリノ哉

茲にて同行四人は二つに分れ一は巴里へ他は伯林の方へと雨の中に袂を別ちぬ

傘をさす手にまとひけり秋の蝶

今度大理石庵藤園ぬしより序文を請はれしまゝ其間の日記帳より駄句二三を摘出して之に代ふることゝなしぬ

明治三十五年六月　晴月淸水澄



緒言

今の時に當りて、吾人の最も研究を要する問題は、將來の日本を如何にすべき乎と云ふに在り現日本の狀況に安んじ、東洋昔時の文明をのみ夢みて、一日の安を偸み絕えて進取の勇氣きが如きは老人の懷舊だにも價せず。さりとて徒に歐米文化の燦爛たるを羨み舊日本を擧げて悉く舶來的新日本と爲んと企つるがごときも、また瓜船的輕薄子の妄想に過ぎず。要は歐米文化の淵源を考究し、彼等の現社會の眞相を洞察し、綱を擧げ目を分ち、之を我が日本の過去現在に鑑み、取捨折衷して、我より自から新にするにあり。

思ふに我が今日の文明は、封建時代の賜ものなり。歷朝强恩の

餘惡なり。歐洲の文化も、また主として彼が封建に原由せざらんや。その本相去ること遠からず、之を發揮し、之を同化する、何ぞ必ずしも難事といはん。

梅櫻桃李、いかにその製作妙を得て、眞形に違はずといへども、天然の香氣を具ふること能はざるは、造花にあらずや。眞の文明は國民の精神に本づく。精神なき文明は、恰も造花に異ならず。世人動もすれば、歐洲今日の開化を評して、物質的文明と云ふ。然れども、その物質的文明を發展せしめたるは、精神的文明に淵源せずんばあらず。綱常立たず、禮儀行はれず、士風の見るべきものなくして、いかで眞の文明を求ることを得ん。

彼を知り己を知るは、たゞに兵家の要訣のみにあらず、世界に國を立てゝ、交りを萬國に求るものは、最もこの心がけなかるべからず。然れども共にその事物の精神發達沿革を明にせず、途に聽いて途に說くがごときは、國に害ありて益なし。

嗚呼大にしては、歐亞權力平均の問題より、小にしては日常風俗の事に至るまで、吾人の研究すべき事項は眼前に積堆せり。吾人はいづれの點より、之を解決すべきか、將來の日本を如何にすべきか。

「歐羅巴」は余が歐洲の紀行なり。又余が巴里滯在中の感想錄の一部なり。されば事を敍するに、順序なく、文また推敲を加へず。これ初より歐羅巴評論として著はしたるものにあらず、又その制度文物を濃かに書き整へんために編せしにもあらざれ

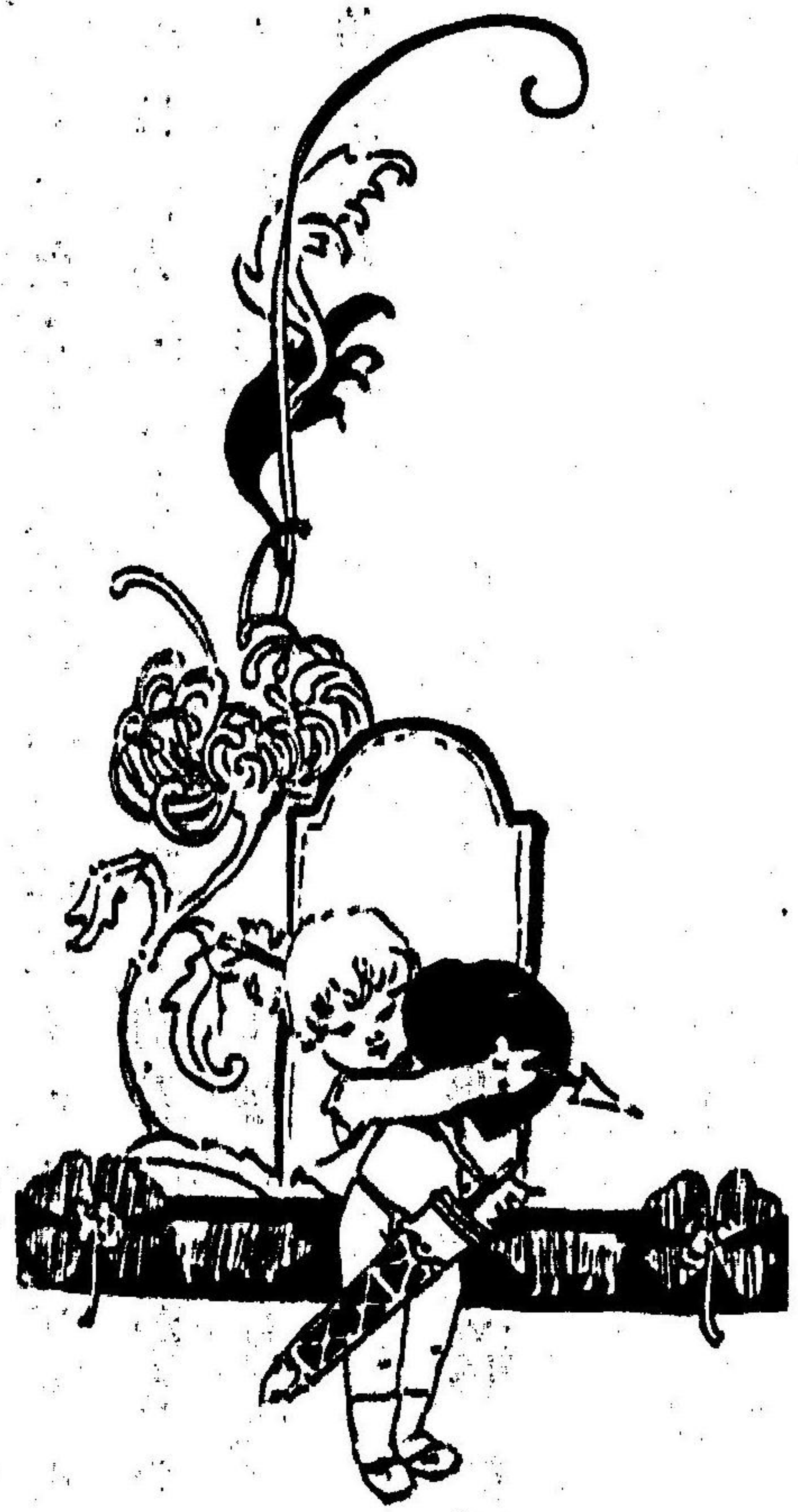
ばなり。かゝれば嘗て日本の諸新聞に報道せしものをも、當時の感想としてさし加へたり。

余元來西史に精しからず、且つ滯留僅に三年に過ぎず。いかでその文化の淵源を研究し、その精華を發揮し得べき。加之ず近時舟車の便大に開けて、邦人の歐米に往來するもの頗る多く、その見聞錄、演說筆記の類續々世に公にせらる。されば余がこの著のごとき、素より蛇足に過ぎざれども、たゞ歐洲漫遊の紀念として刊行せしのみ。然れども人おの〳〵感想あり、讀者若し之に依りて彼を知る參考の一ともならば、余は望外の幸ならん。

卷首なる諸家の序言は、彼の地に在りて親交し、若くは同遊せしに因み、紀念の爲に、特に乞ひて揭けつるものなり。その口繪は、余がこの著あるを聞き、淺井忠、和田英作の二君が佛國より遙に寄せられたるもの、又押畫の巴里リグサンプール公園圖は、嘗て共に彼の地にありし岡田三郎助君の自からかきおくられしものなり。共にいづれか余が譽れならざらん。

明治三十五年六月

東京に於て　池邊義象識



歐羅巴目錄

第一編　佛國巴里

巴里人の生活……………………一
家庭――共同門――室內裝飾――衣服――飲食――儉勤主義――
樂園の樂み――日曜休日
學　校……………………一一
公立私立――學校內の裝置――男女小學生徒の褒章――巴里大
學――講演――佛國學校――演締の講義――師範學校以下各種
專門學校――學士會院
圖書館……………………一五
國有圖書館――サンゼ子ビユーヴ圖書館――書架及び閱覽室

寺院……一八
佛國の公認教‖ノートルダーム‖寺内のありさま‖マドレーヌ‖サックレクール‖社會の禮讃寺門より出づ
墓地……二一
奈破翁一世の陵墓‖その構造‖國葬寺パンテオン‖ペールラセーズの墓地‖その構造‖墓碑墓石‖モンマルトル‖墓参及び墓祭
公園……二八
ボアードブーローニュ‖公園の快樂‖大競馬‖花戰‖男女の晴着‖花車‖ジャルダンダアックリマタシヨン‖動植物園‖休息料理店‖リユクサンブール‖ビュットセウモン‖モンソー‖ボアードヴアンセンス‖植物園‖チュイルリー以下諸公園‖公園軍樂
博物館……四四
ルーブル‖その歴史及び陳列種類‖リユクサンブール‖裸體美術‖ヴェルサイユ‖その歴史及び陳列種類‖庭園‖歴史畫‖中央殿路易十四世崩御の間‖下院及び國民議會‖トリアノン宮‖車駕室‖小トリアノン宮‖庭園‖盟約室即ジユードポーム‖カルナバレ歴史館‖古代王代革命時代の諸品‖巴里古圖‖バスチーユ及その紀念碑‖ギメー東洋館‖その歴史及陳列品‖日本の古器‖サンゼルマン古物館‖間大公園‖クリユニー‖その陳列品‖ギアツエラ‖その陳列品
劇場……八〇
オペラ‖その建築‖オペラコミック‖テアートルフラン

セー＝オデオン＝我が國の劇と異なる點＝觀客の用意＝
寄席及び舞踏場

凱旋門……八七
凱旋門の歴史＝その構造彫刻

エッフェル塔……八九
世界一の高塔＝塔上の諸店＝エッフェル氏

勸工場……九二
ルーブル館＝ボンマルセー館＝ベルジャルヂニー以下諸館＝陳列の狀＝賣子の敏捷

花の色〻……九七
草花さま〴〵＝公園以下小庭の花＝花の植ゑ方

菊花展覽會……一〇一
菊花は日本より入る＝花輪＝花の山＝花の名＝諸野菜の陳列

犬展覽會……一〇五
世界各國の犬＝獵犬＝遊犬＝犬の裝ひ

市……一〇八
臨時市＝市場の形況＝買人賣人

郵便古切手……一一二
市を立てゝ切手を賣る＝古切手の相場＝古切手を集めおく風

奈破翁一世大戰畫館……一一七
パノラマ＝ジオラマ＝奈大帝の遺物

巴里の朝……一二一

夏の朝――道洗ひ人――新聞牛乳配達人――麺麭車――荷車――乞食立ん坊――食物車――麺麭屋――騎兵憲兵巡査――朝寢の風
巴里の夕……一二七
夏の夕――官吏以下諸職工の群行――珈琲店――夕立
巴里の夜……一三一
初秋の夜――珈琲料理店――劇場寄席――舞踏室
巴里の月……一三五
仲秋の月――文明の月――電燈瓦斯――月に對する感想
議員選擧の張札……一四一
甲黨乙黨各その檄文を張る――張札の厚さ五六寸に上る
歷史行列……一四五
巴里市の祭――行列のさま〴〵――巴里船の標章
散髮及び洗湯……一四六
散髮店の看板――店內の裝飾――巴里風刈込――湯屋――浴室――入浴者の心得――日本人の如く入浴を好ます
カルナバル祭……一五二
花戰――コンフエッチー――激戰の模樣――花戰の心得
廣告……一五九
廣告塔――廣告車――廣告人――利用廣告
プラスドラコンコルド……一六一
コンコルドの美觀――ストラスブール彫像
悽風慘雨……一六五
フエリクスフオール大統領の死――その葬儀――新大統領の選

擧‖國民議會‖フォール氏の葬儀‖王黨及び國民黨
郵便及び電信……一七八
電線は地下に敷設す‖電信端書‖郵便電信局
交通機關……一八一
馬車‖汽車‖汽船
地獄極樂……一八五
モンマルトル‖地獄室の裝置‖極樂室の裝置
サンクルー……一八九
遊記
萬國大博覽會……一九四
博覽會の敷地‖建物‖諸陳列館‖殖民地諸館‖日本の陳列館‖觀覽人‖夜の景色‖餘興町

第二編　巴里より白耳義國ブリュッセルに至る

出發……二一二
トロカデローの寓を出づ‖北停車場‖汽窓の眺望
ブリュッセル府……二一五
市街のあらまし‖人口
ウォートルロー古戰場……二一六
獅子塚‖武器展覽場
王宮……二一九
建築式‖レオポルド二世
國會紀念碑……二二〇
建立の時代‖レオポルド一世銅像

裁判所…………二二一
建築時代及び構造の莊嚴
ゴツフロードブーイヨオンの彫像…………二二二
美術博物館…………二二二
市中雜感…………二二五
煙草店‖男女の服裝‖道路及び建築‖パッサージュ‖犬車
ダンテール工場…………二二五

第三編　ブリュッセルより和蘭國海牙に至る

出發…………二二六
北停車場‖蘭國田野の風‖蘭國税關‖ロッテルダム

海牙府…………二二七
ベルビュー旅館‖人口
美術博物館…………二二八
レンブラント及びポッテ兩畫伯
蘭國獨立紀念碑…………二三〇
建立の時代‖彫刻意匠
大公園及び離宮…………二三一
老樹園を擁む‖離宮の建築‖その室内裝飾
スケベニンゲン海水浴…………二三三
キユルハウス‖その築架‖眺望‖貝細工
フツマン固有の服裝…………二三四
女皇陛下…………二三五

海事歷史展覽會……二三五
我が古文書——東洋日記——長崎蘭國商館及び出島の圖——蘭國古今の欵
ドレフト……二三七
維廉一世の古跡及び墓——ユーゴードグローの墓——陶器製造所

第四編　海牙よりアムステルダムに至る

アムステルダム旅館……二四〇
アムステルダム市……二四〇
商業の繁盛——人口
博物館動物園……二四一

金剛石製造場……二四一
蘭國雜感……二四一
地形——常に水と戰ふ——牧場——風車——古今の變遷——海事思想——清潔を尚ぶ——我が國風と相似たり——男女の服裝——凧上り

第五編　アムステルダムより獨逸國伯林に至る

停車場……二四五
錢貨の交換
滊窓の曉……二四五
伯林……二四五
コンチナンタール旅館……二四六

維廉大帝の陵墓……二四七
樹中の小宮殿＝陵墓の構造
チエールガルデン……二四八
面積＝紀念碑彫像＝大噴泉＝大動物園
凱旋門及び紀念碑……二五一
ウンテルデンリンデン＝凱旋門の構造及び門上の立物＝凱旋紀念碑＝その建設年代及び彫刻
普國歴代帝王彫像……二五三
現皇帝の熱心
王宮……二五五
構造の一班＝殿内の裝飾
ペルビュー旅館……二五九

工業試驗所……二五九
セダンパノラマ館……二六〇
ポツダム……二六一
位置地形＝ポツダム城＝城内の構造＝サンスーシー公園＝平和寺院＝サンスーシー城＝その眺望＝風車屋
維廉大帝山莊……二六五
老帝創業の殿＝室内のありさま＝老帝の遺物
伯林博物館……二六七
舊博物館＝新博物館＝國民博物館
伯林雜感……二七二
家屋及び道路＝凱旋街の彫像＝維廉大帝騎馬の像＝交通機關＝珈琲店＝男女の服裝＝婦人の風彩＝飮食物＝

ここに麥酒――學生決闘組――現皇帝の肖像――軍人及び交際社會――皇帝の逆鱗――武人のめかし――書籍――東洋語學校――日本の新聞――巴里との比較

第六編　伯林より露國聖彼得堡に至る

汽車の友……二八〇
露人と談す――百姓家のさま――税關
聖彼得堡……二八三
佛蘭西旅館
彼得大帝創業殿……二八四
木造小殿――大帝の遺物――基督の像――その參詣者――戰艦
歴山公園……二八六
大帝創立寺院――夏公園
孤兒院……二八七
建設年代――私生兒――附屬學校
王　宮……二八九
構造及び殿内裝飾――徽章室――鹽と麵麭との獻上盤――歷史及び肖像室――寶冠
勸工場……二九三
芬蘭土の話……二九三
セントイザック寺……二九四
建設歷史――建築式――頂上に昇る
彼得大帝銅像……二九七
大　學……二九八

學科學生 ‖ 東洋語學
美術學校……二九九

第七編　聖彼得堡より莫斯科に至る

汽車中の睡眠……三〇〇
莫斯科……三〇〇
莫斯科宮殿……三〇一
宮殿の歴史 ‖ 構造 ‖ 殿内裝飾 ‖ 支那風建築
ウースペンスキー寺院……三〇三
莫斯科の位置及び人口……三〇三
露國の古風俗
雀ヶ岡……三〇四
奈破侖の古跡 ‖ 全市の眺望
莫斯科市古今の概……三〇五
韃靼屋敷 ‖ 英人が原
露國雜感……三〇六
言語 ‖ 社會の階級 ‖ 財政 ‖ 力試し政界 ‖ 無智無能 ‖ 國民一般の氣象 ‖ 英人を憎む ‖ 宗教熱 ‖ 人民怠惰 ‖ 現皇帝の勉强 ‖ 貴族社會の腐敗 ‖ 男女の服裝 ‖ 馬車 ‖ 黑麵麭 オーツカ、オールルーブル ‖ 茶を嗜む ‖ 建築 ‖ 道路 ‖ 看板 ‖ 職業の害 ‖ 旅行券 ‖ ブールボアール ‖ 交際時期 ‖ 汽車出發に鐘を叩く

第八編　莫斯科よりオデッサに至る

汽車の中……三一六

巨婦＝英貨不通＝田野の景
キエフ……三一九
人口＝停車場
オデッサ……三二〇
オデッサの位置……三二〇
道路建築＝人口＝カテリーヌ后の像
歴山公園……三二一
歴山二世追悼塔
クリミア古戰場……三二一
銘の文

第九編　オデッサより土耳古國コンスタンチノープルに至る

黒海……三二三
滊船＝風波起る＝ボスフォクス海峽＝その絶景＝上陸＝稅關
コンスタンチノープル……三二七
鹵簿を拜す……三二七
寺院行幸＝護衛文武官＝拜觀人＝王命即ち神命
回敎僧徒の舞……三二九
舞僧＝踊僧
マホメット二世の墓……三三〇
セントソフィー大寺……三三〇
土國料理……三三一

口繪

土京雜感……三三二
道路家屋の敗頽‖物賣人‖大道の犬‖服裝‖珈琲店‖羊肉料理‖情弱なる風俗‖不潔‖一夫多妻‖夫妻別居‖人種及び言語文字‖補綴‖骨格‖露國婦人の評

第十編　コンスタンチノープルより匈牙利國ブダペストに至る

ブルガリア……三四〇
驢馬‖男女の風俗‖ソフィア府
匈國に入る……三四一
稅關‖七面鳥
ブダペスト……三四二
匈牙利旅館……三四二
ブダペスト略史……三四三
位置‖地形‖人口
王宮……三四三
公園……三四三
大學……三四四
國民獨立論‖レージユー伯‖外國語排斥‖法科大學生の倶樂部‖愛國者コツシユトの像
議事堂……三四八
建築の壯大‖內部裝飾
雛菊島……三四九
大遊園‖鑛泉湯

日本珈琲料理店……三五〇
何國人と大に談論す
ブダペスト雜感……三五二
畫繪の家屋―服裝―巡査―交通機關―ダニューブの釣橋―大市場―國民の獨立進歩主義―ダニューブ川の眺望―何國々歌

第十一編　ブダペストより墺太利國維納に至る

維納……三五七
クラツマイエル孃の家……三五七
マリーテレーズの銅像……三五八
建築時代及び彫刻

セントエチエンヌ寺……三五九
オペラ……三五九
帝室寶物展覽所……三五九
寶冠
王宮……三六〇
建築時代及び彫刻―フランソアー二世及びヨセフ二世像―附屬圖書館
眞濟水宮……三六一
代々の離宮―奈破翁二世―庭園
美術館……三六三
帝族學校
大公園……三六三

面積―裝置
維納雜感……三六四
建築及び道路―現皇帝の儀容及び勉勵―洗足式―宮中祇候―墺匈國住民統計―美術工藝品―書畫會―男女の服裝―馬車荷物車

第十二編　維納より伊太利國羅馬に至る

墺伊の國境……三七〇
山紫水明
ヴェニス……三七一
市街のありさま―舟を以て車に代ふ―水路即ち道路―セントマルク寺―日本名譽領事館―龍頭の舟―乞食―公園―船遊び―支倉一行の遺跡―人口
滊車の中……三七四
相乘の伊人
羅馬……三七五
セントポール大本山……三七七
門前町―正面前及び廻廊―本寺の敷地―本寺の歷史―彫刻―歷代法王の墓―參詣者
ヴァチカン宮殿……三八〇
敷地及び閒數―寄附建築―現法王レオン十三世―古代書伯の書―世界美術の淵源
法王祈禱式……三八一
法王宮の兵士その服裝―巡禮―法王の行列―祈禱式―音樂―法王の抱負―王國政府との關係

羅馬古跡……三八五
上院及ひ大闘獸場以下
羅馬雜感……三八六
滊車の旅思＝古今盛衰の歎＝皇太后陛下の坤德＝財政難＝かけね＝博物館＝圖書館＝その入場料＝伊太利料理＝氣候＝カルナバル祭＝モザイツク

第十三編　羅馬よりナープルに至る

ナープル……三九一
博物館……三九一
本館の特色＝ポンペイ發掘品＝王家の貴重品
ポンペイ……三九二
海岸通り＝ポンペイ古跡入口小隊列所＝發掘の跡＝噴火地震全市埋沒及ひ發掘の由來＝フィオルリー氏

第十四編　ナープルよりジエノワに至る

古城壁……三九九
滊車の動搖……三九九
ジエノワ……四〇〇
ロンドン旅館
墓處……四〇一
藝術人＝墓地の構造＝墓石彫刻
コロンブスの像……四〇三
ガルバルヂーの家……四〇三

ジエノワの位置……四〇三
人口‖輸出入
伊國の南北部……四〇四

第十五編　ジェノワより瑞西國ジェチーヴに至る

トリノ……四〇五
伊國北部の舊都‖井上清水兩氏と別る
モダーヌ……四〇六
アルプス山隧道……四〇七
ジェチーヴ……四〇八
リントワル旅館……四〇八

我か天長節を祝す
瑞國の山水……四〇九
歐洲夏時の大遊園‖ジェチーヴ湖及ひ白山
ルーソーの像……四一〇
瑞國婦人の服裝……四一〇

第十六編　ジエチーヴより佛國巴里に至る

マーコン……四一一
巴里リヨン停車場……四一一
トロカデローの寓に歸る……四一二
旅行中の携帶品及ひ總費用……四一二

第十七編　巴里より英國倫敦に至る

出　發……四一五
サンラザール停車場‖デェップよりニユーヘブンに航る‖怒濤暴雨
倫敦ヴィクトリア停車場……四一六
シヽール旅館……四一六
キャンベェルウェルの寓居……四一七

第十八編　英國倫敦

霧の都……四一八
白晝燭を照らす‖黑霧‖霧は倫敦の花
衣食住……四二〇
家屋の構造‖彫刻‖食物‖ウヰスキー酒‖麵店‖珈琲店及び料理店‖男女の服裝及び頭髮‖大學生の服裝‖實利主義
倫敦市及び交通機關……四二六
市の區劃‖倫敦シチーの繁榮‖市長‖地下鐵道‖乘合馬車‖街馬車
公　園……四三〇
ハイドパーク‖ケンシングトンガーデン‖リーゼントパーク‖ヴィクトリアパーク以下諸公園の快遊
宗教及び英雄巣窟……四三一
新教‖宗教熱‖日曜日‖國寺‖文武名士の銅像及び石像
議事堂……四三四

歷史及び建築式‖上院下院‖院内裝飾‖彫像
英蘭銀行株式取引所及び市場……四三五
銀行の資本金‖その起元‖遊覽人‖世界相場の中心‖
建築歷史及び内部の裝飾‖市場の數‖肉の市場
博物館……四三七
大英國博物館‖サウスケンシントン‖美術館‖ナート
ガール‖ローヤルアカデミー‖兵器館‖肖像館
蠟人形館……四四四
マダムタッサード‖歷史人形
水晶宮……四四七
構造‖庭園‖宮内諸店
綠威……四四八
天文臺‖海軍歷史館‖眺望
倫敦雜感……四五〇
ホームの嫌み‖氣風‖紳士の信用‖社會の秩序‖婦人
の獨步‖乘合馬車の中‖クリストマスカルト‖街端音樂
美術店‖表面の綺麗‖動物園‖小學校の歷史書類‖新
聞賣花賣‖官尊民卑の風‖兵士の横行‖共同便所の設

附錄

感想漫錄……一
天下の遊園‖強國弱國‖帷女‖國民思想の激變‖神社
と紀念彫像‖世界各國の文字‖紋所僞事‖刑具‖議會
‖裁判所‖我が公使館及び領事館‖商工業の不聯絡‖

古美術品‖鐵工場の日本品‖大博覽會の我が出品‖飾畫舖‖保存熱‖路傍にて畫狀を認む‖公共道德‖衣食住の安全‖誕生日‖年中行事‖コンミユニオン‖氏神氏子‖婚姻‖喪服‖伊人の刺客‖名家の優遇‖龍騎兵‖伊人和達‖ルマタン新聞義捐金募集‖郵便則夬‖薔薇運搬牡丹櫻‖アルザスローレン‖菓子屋‖物賣‖鳩雀‖人を招く手つき‖物を贈る時の習慣‖姓名の稱呼‖十二ケ月の名‖社會の秩序‖官吏の謙儉‖伯林の學生倫敦の紳士‖歩行‖男女の睦‖婦人は半病人‖各都府の成

挿畫目錄

第一編　巴里

リユクサンブール公園……一〇
ルーブル博物館……四六
ウエルサイユ宮殿……五五
オペラ……八二
シヤンゼリセー街……一一四
ブールバールデジタリアン……一五四
プラスドラコンコルド……一六五
巴里萬國大博覽會……一九七

第二編　白耳義

ウオートルロー古戰場……二一八
ブリユツセル王宮……二二〇

第三編　和蘭

レンブラントの畫……二二九

蘭國獨立紀念碑……二三一
海水浴場……二三四

第五編　伯林

ルイズ皇后彫像……二四九
凱旋門……二五三
戰捷紀念碑……二五四
獨逸皇帝御肖像……二五八
維廉老帝彫像……二七三
フリードリーヒ大王彫像……二七四

第六編　聖彼得堡

彼得大帝創業宮……二八五
セントイザック寺院……二九五

第七編　莫斯科

莫斯科宮殿……三〇二

第九編　土耳古

土京コンスタンチノープル……三二六
土國風俗……三三五

第十編　匈牙利

ブダペスト議事堂……三四九

第十一編　維納

マリーテレーズ彫像……三五八
維納市街……三六一
墺國皇帝御肖像……三六六

第十二編　伊太利

ヴェニス市街……三七五
セントポール寺院……三七九

羅馬古跡……………………三八五

第十三編　伊太利

ポンペイ古跡……………………三九七

第十五編　瑞西

瑞西の山水……………………四〇九

第十八編　倫敦

ハイドパーク……………………四三〇
ネルソン彫像……………………四三三
英國銀行……………………四三六
美術博物館……………………四四一
倫敦古城……………………四四五

歐羅巴目錄　終

歐羅巴

池邊義象　著

第一編　佛國巴里

巴里人の生活

天下の大公園と呼ばれ、文化の大淵泉と稱せらるゝ巴里人の生活は、身に錦繡綾羅を纏ひ、食に山海の珍味を盡し、入るに金殿玉樓あり、出るに肥馬に鞭うつ徒のみ多からんと思ふものあらん。實にや巴里萬街、その道路は坦々として砥のごとく、その家屋は巍々として空に聳え、馬車電車織るがごとく、電燈瓦斯相輝くを見なば、彼等の生活のいかに高度に昇り居るかを想像するに餘りあるべし。春の花の艶なるを見て、幾多の苦節を思はざるごとく、事物の眞相はその皮相と相反することあり。押並べて之を言へば、世に巴里人の如く節儉なるはなく、巴里

人のごとく貯蓄心に富めるはあらじ。肥馬に鞭うち軽裘を着て豪奢を装へる徒素より少からざれども、全體の巴里人より之を求めんは、砂中の玉のごとく、暁の星のごとき思ひあらん。

此にいはゆる普通巴里人の生活の狀を敍せんには、まづそが住居より說きはじめて、衣食に及ぶべし。

家屋は即ち歐羅巴流の共同住居にて、一家族にて一家屋を專有することは彼の富家の徒ならでは能はず、大かたは六七階の大厦の中に、一室若くは二三室を借受けて住み成せり例へば二階の右側はア氏にして、左側はイ氏、三階の一番室には外國人住み、二番室には內國人住むといふありさまにて、壁に壁を隔つれば、見ず知らずの人の住居なり言ひ換れば、一家屋は即ち一町內の如く、そが中に數多の番地を分ちて各住居するがごとし。されば一家の門は一町の入口のごとく、その廊の裝飾もひかれたるは數多の道筋を附したるがごとし。その一階二階と昇りゆく梯子は、大方螺旋形を為せるが、その欄干及び一階昇るごとには或は彫刻物を据ゑ、或は花卉を飾り、休息椅子を置くなど、昇降の人々をして、倦くことなからしむ。最も大樓に至りては、必ず數多の昇降機を取付け、人をして、瞬時に上下せしむるやうにせり。

七八階もある家屋といへば、大風地震火災等の時には、いかゞあらんと想像する人もあるべけれど、彼等の建築にては、さる憂は稀なり。これ大方鐵骨石造にして火には極めて縁遠く、山を拔くばかりの大風ならでは破損の憂なく、且つ地震は彼の土には殆と皆無なれば、その謂を知れるのみにて、憂ふべきものともせず。且つその壁は厚く固く、一階ごとの仕切も同じく石と煉瓦とにして、更に厚板を以て疊み合せたれば、一階の火事も二階にて知らざることあり。鄰室の火事すら餘所事に過ごすがごときは必しも珍らしからず。

水管と瓦斯管とは、如何なる上層にも引かれたれば、例ひ七階の上に住居したりとて、更に水火の不自由なく、また道を隔てゝ我と相對せる家屋も同じさまなれば、窓を明けて相臨めば、高きに居るごとき心ちもせず。

門は押並べて一家に一個づゝ設あり、鐵柵鐵扉若くは厚板なり。その門傍には必ず番人（コンシエールジユ）ありて、出入を監督し、住居人及び來訪者の便を與ふ。門の鍵は、その番人之を預り、夜に入りては、堅く閉づれとも、住居人及び來訪者の出入には、いかなる深夜も、番人責を負ひて開閉す。その室ごとには、別に嚴重なる戸あり。こはその住居人の小門にしてその鍵は住居主之を掌れり。

室内の工合は、その人々の嗜好と貴富とに依りて、一ならざるは言ふまでもなし。されど概して、坐敷、寢室、書齋、食堂及び厠所を備へざるは稀なり。やゝよきものは、更に湯殿及び化粧室を設けたるもあり。その裝置に至りては、素よりさまざまなれども、我が日本に比して、大差あるものあり。一口にいへば、我は淸楚淡泊なるを愛し、彼は富贍濃厚なるを喜ぶ。例へば我が坐敷の裝置としては、額、掛軸、さては置物などにて止むも、彼の坐敷には、いはゆる暖爐の上の置物のごときは、時計あり、ランプあり、小彫刻あり、寫眞あり、陶器あり、漆器あり、殆ど一の小店のごとく、四方には額をかけ、帳を垂らし、種々の珍奇なる物を夥々しく並べ飾れり。加之ず必要品として、卓子椅子相並び、烟草函マッチ函相對し、書帖寫眞帖など打重ねたる、やゝ物ずきの人の宅は、さながら小博物館のごとし。是れ彼はあらゆる限りの物品を並べたてゝ、常に自から慰みて人にも誇り、我は珍品の一部分のみを出し置きて、その全體を匣中に秘藏し置く習慣に本づくものなるべけれど、なほ考れば、我が家屋製造の不完全なるより、終にかゝる習慣を生じたるも知るべからず。

こはたゞに坐敷のみならず、食堂も之に準じ、書齋も之に準じ、寢室も之に準ず。中にも寢室のごときは、我が俗の如く、夜ごと／＼に取裝ふものにあらず、いはゆる寢臺の据ゑ置きなれば、或は飾帳を垂れ、薄帷を蓋ひ、之を飾るに種々の物を以てし、一は和樂安眠の媒となし、一は四方の見苦しきを防げり。

衣服は男女ともに、直に毛織物なるは今更言ふにも及ばず。男子の禮服は燕尾服、之に次くは、フロックコート、モーニングコート、ジヤケツ等、總て吾人の知る所のごとし。外出の時に外套を用ふるも亦同じ。その帽は高帽子は禮服用なれども、常

にも之を用ふ。山高帽子中窪帽子などは、最も軽装の時ならでは用ひず。履はボッチーヌと称する釦鈕留、最も流行し、半履及び護謨履、編上げなど、之に次げり。その外出の時は、傘ならざれば必ず杖を携ふ。それも地をこつ〳〵と突く為にあらず、小脇に挿み若くは提げつゝ歩行するが常なり。

女子は例のコルセットにて、蜂腰を学び、ジヤケツの肩怒り、ジユブの裾長う曳きたり。夏は絹地を用ふるも多かれど、大方は毛織物なり。帽子は、花或は鳥の羽毛等にて飾れるもあり、絹物にて文ざれるもあり、又羅紗麥藁の素帽もあり。髪はその髷を頭の頂上に執り、前髪を立て、雨のつとを出す。いづれもそのはえぎはは、労然として縮れたるを喜ぶ。その髪は金色にして波文を成せるを尚び、所謂釋迦頭のやうに縮れたるを卑しむ。鼻は高く、頬はやゝ紅色を帯び、眼は碧に、歯は白く揃へるを願へり。外出の時には、コル、ベリイスなどいふ長き短き外套を用ひ、傘を携へ小袋を提げ、或は長柄の眼鏡扇子等を取付く。押並べて裾はいと長ければ、その歩行の時には後裾を取りて、塵に汚れんことを防ぐ。履は編上げ若くは釦鈕留多し。家に在る時には、帽子を脱し、上履を穿ち、或はコルセットを除き居るも見ゆ。奉所その他働くべき事務に当る時には、更に上着を装ふ。こは上下つゞきたるものと、下ばかりなるとあり。ダープツエといふもの是なり。下女の類は常に之を取装へり。

一種異様なるは乳母の服なり。下着は普通なれども、上よりいと長々しき衣を装ひ、頭髪には、大黒頭巾風のものを冠り、その幅広く、丈長きを、袴の裾辺に垂らしたり。彼等が吹風にそを長う吹靡しつゝ、揺籃を推しゆくありさまは、鶴のごとく、肩擦り合へる人の中に、長閑なる風流姿とも見らるべし。

女子の若きものは、頭髪長く後に垂れ、袴は纔に膝に至り、中には手も足もあらはに出したるさへあり。男子は、一層活潑に出て立ち、軍帽軍服めきたるものをさへ取装へる、勇ましく愛嬌多し。幼児は多くは白装せしめ、その顔には薄紗を曳き掛けたるなど、子を思ふ親心さへ、おしはかられて頼母し。

飲食は、各家に於てするが普通なり。止むを得ざる事状あるものは、料理店に行く

もあり。飲物は、常に葡萄酒を用ふること上下同じ、麥酒コニャック、アブサンの類少からざるにあらざれども、食事には、十中の九分九厘まで、赤白の葡萄酒なり。但しシャンパンは特別の饗應や、ゝ儀式立ちたる時に祝ひ用ふること、歐洲一般の體なり。

食料は、麵包、獸肉、鳥肉、魚肉、野菜若くは菓實乾菓の類をも合せ用ふ。孰れも鹽バタ、牛乳、酢、からし、胡椒、牛酪等にて之をあひしらふ。醬油は稀に英國のソースを用ふるもあれども、概しては之を好まず。食事の時刻は、夕食をヂン子ーといひて之を重んじ、晝食はデジユ子ーといひて之に次ぐものとす。朝はプッチー、デジユ子ーといひて、小麵包珈琲位にて濟すもあれば、牛乳一椀、または茶一杯位にて終るもあり。されば重なる食事は、一日に二度を常とせり。

菓子の類は、頗る多かれども、我が國のと全く異なれること、人々已に味ひ知るがごとし。菓物は我に比してその種類よきが多し。菓子と菓物とは食事ごとに必ず食ふべきものとせり。但し我が國のいはゆる點心（八つ時にお）の如く、食事時間の前後に食ふこともあり。

そも〳〵巴里人は、前にいひしごとく、儉勤貯蓄を旨とするものにて、いはゆる普通社會に在りては、居室とても成るべく奢侈を避け、衣服とても決して贅澤を尙ばず。飲食は勿論、その僮僕を使役し、物品を使用するがごときも、嚴に必用を充たすに止めて、決して無用の贅澤をなさず。例へば此に中等生活を營み得る夫婦ありとせんに、必要なければ下女をも雇はず、夫は朝より外に出でゝ働けば、婦は必家に在りて、その室内全體の掃除、衣服の縫綴洗濯、又は臺所の事に至るまで、一人にて之を行ふ。かゝれば品卑しからざる婦人にして、自ら網袋を提げて肉屋、八百屋に至ることもあり。暖爐の炭に纖手を黑くし、靴下のつくろひに指先を痛むることなど、敢て珍らしき事にあらず。その衣服のごときも、名高き縫綴店に、流行形を求むるにあらずして、適當なる勸工場の出來合等にて濟すもあり。食物のごときも、最も價の安きをあさり、道を遠しとせずして、定まれる市場に赴き求むるもあり。大抵中食は一肉一菜にして、夕食に至りて更に一汁を添ふるが普通なりとい

これも必ずチーズを副食することは、我が俗の漬物を愛すると同じ。

かくて夫婦相食する時は、互にその日の勤務の模様を語り、或は衣食の上に及び進んで文學藝術に渉るもあり。その間々相喜び相親しみて、和氣靄然たるは羨むべきものあり。小供あるものは、必ず別卓にて飲食せしめ、その母肉を割めば、その父麵包を切るといふありさまにて、更に團欒の趣を増すが如し。下女ある家にては、それには必ず白色のターブリエ、白色のボンチットを頂かせて、常に卑遜を注意せしむ。

食し了りては、別室にゆきて、音樂を奏し樂しむもあれば、例の飾り立てたる物品を、更に珍らしげに誇り合ふもあり。時來れば、又別れて各その職務に從事し、聊にでも、その日の仕事の進まんことを期す

日曜休日には、相携へて公園または郊外に出て、球を撞ち馬に乘るなど、各その好む所に從ふ。彼等は何を除きても、先づ我を愛し我に伴ふ夫婦を愛し、その快樂に供すべき金錢を愛し、最も愉快に最も安樂に一生を過さんことを期せり。され

は往々親子の愛を割きても、一身の快樂を貪らんことを務むるものあり。

學校

父母の懷を離れては、幼稚園に遊び、小學校に入り、高等學校に進みゆくありさまは、今は全世界文明國の制度習慣となりて、敢て事々しく言ふ要あらじ。初等教育の學校は、公立私立の二つに分れて、佛國民は義務として必ず就學せしむ。その公立は素より無月謝にして、私立といへども、宗教家の慈善的に教育し、又は市及び慈善家の出費せるもあれば、貧民の子弟も、入學に苦ならず。中等教育も同じく公私の二つありて、その私立は、宗教家の手に歸したるが多し。

學校内の模様などは、我國と大差なけれども、その中學校の寄宿制度の如きは、頗る嚴重なり。ことに各學校を通じて、その設備の完全にして、校内の清潔なる課業以外の智識を與ふることに付て深く意を致せるは、我に優ること數等なり。

例へば、小學中學の如きも、その講堂教場には歴史的博物的醫學的その他百科に

關する繪畫物品を陳列し、或は英雄豪傑の彫像を置き、或は精細なる地圖、世界各國の風俗圖、及びその雛形を掛け並べ、または小植物園を設けたるなど、生徒をして課業の外に、知らず〳〵百科の智識を注入開發せしめんことを期したり。

男子も女子も、一體に活潑に見做さるゝは、その服裝の然らしむるものなるやも知らざれども、彼等の習慣、彼等のしつけ方も、また預れりといふべし、その男子の生徒は、大方軍人風にして、背嚢を負ひ、足高く飛び廻はれるなど、見るも心ちよし。女生徒は多くは黑裝して、頭髮長く後方に垂らし、脛あらはに出して馳せまはれる、美しく愛らし、殊に學術品行共に優等なるものには、褒狀章を與ふる習なるが、その男子のは普通の勳章のごとく胸にかけ女子のは肩章にして、勳一等の綬のごとくいづれも靑黃赤紫と分たれたり。之を獲たるものゝ誇りがに裝ひ步けるは末賴もしく打守らる。

ソルボンヌ大學は、羅甸街（カルチエラタン）に在り。もとは一の寺院にして、聖路易（サンルイ）路易九世の侍僧ロベルト、ドソルボンの創立にかゝれり。十六世紀の頃、有名なるリシュリュー之を神學校と爲しゝより、漸次擴張し、十八世紀に至り增築して、遂に今日の如く文科、理科、法科、醫科の諸大學を合せ、佛國唯一の學園となれり。

大學の入口には、文學、科學、博物學、物理學、數學、歷史、地理、哲學、考古學等を表はしたる彫像あり。又圓塔の下には、リシュリューの墳墓あり。各學科の講堂、圖書館等孰れも構造の壯大にして、整頓せるは言ふまでもなく、四壁はその學科に關係ある繪畫を以て充たしたり。又その敎室には、古代學者の名を附し、長廊即ち通路には所々に名士の彫像を備めたるあり。講演は無謝儀にて、一般公衆の隨意傍聽を許可するものと、學籍に名簿を揭げたる、いはゆる眞の學生に限るものとあり。しかれば敎授の德望學識手腕、學科の性質等によりて、講堂立錐の地なきこともあり。寂寞雀羅を設くべき時あり。余は屢ゝ文科大學にゆきしが、その佛國文學史評論開講の時の如きは、一二時間も早くより人々蟻の甘きに附くがごとくに詰めかけ、數百人を容るべき敎室なりしも、果ては佇立せるもの、爪立て人の肩上より覗き見るもの、脇の下をくゞりて耳をそばたつるもの築山のごとく、孰れも熱心に謹

聽せるさま殆ど驚くべきものありき。これ佛人の文學を好めるにも因れども、敎授其の人を得たりしに原因せりといふべし。殊に珍らしく感せしは、是等の人々は男女相半し、老少交々雜はり、さながら我が國の公開演說の如き趣ありしことなり。

又之につゞきてコーレージ、ドフランスといふ大學あり。一千五百三十年、フランソアー一世の時建てられ、その後屢〻修繕增築して、今は完全なる校舍となり、四十の講座を設けて、何人にても、隨意傍聽せしむ。その學科は、文科、理科、法科等總てに渉れり。余はこゝにて斯六典の講演を聞きたり。この敎授はペーリス、ダーランといふ有名なる東洋學者にて、その東西古今に亘たりて研究の行屆きたること、豈驚くべからずや。

初等師範學校、高等師範學校あり。古典學校あり。東洋語學校あり。美術學校あり。私立の諸學校は數ふるに暇あらず。その東洋語學校にては我が日本語をも敎授し、その敎科書には太平記などをも用ひたり。又天文臺氣象臺あり。巴里緯度局あり。

その學者の團體にては、學士會院を第一とす。會はその部を分つこと五つ、一に云く佛蘭西學、二に云く、銘記史學及び美文學、三に云く科學、四に云く美術、五に云く道德及び政治學。各會院に四十人づゝの博士あり。その科學には六十六人を常員とす。廣く古今內外に渉獵し、研鑽考究して學界に貢獻す。これ實に佛國智能の淵源なり。

圖書館

圖書館と博物館とは、國民敎育に最も必要なるものなれば、凡そ一國都を成せる街にして、この二物の設けられざるはなし。巴里なる國有圖書館は、蓋し世界屈指の大館なるべし。こはフランソアー一世の時代に創業せられ、路易十三世及び十四世の大臣たりしマザランに至りて、殆ど成功せり。その後年を經て益〻整ひ、遂にこの大館を形つくるに至れり。館はルーブル宮を距ること遠からざる地に在り。庭園あり、閱覽室あり、休憩室あり。その建築彫刻の美また稀に見る所なり。藏書

を四部に分つ。一を印刷物及び地理とし、二を稿本類とし、三を美術板刻類とし、四を紀念彫刻及び古物古文類とす。圖書十萬卷寫本十七萬五千冊地圖及び海圖三十萬卷、外に貨幣及び賞牌の類、十五萬個に達せりと云ふ。

サン、ゼチビエーブ圖書館は、法科大學に續きて、パンテオンの傍に在り。一千八百四十八年より五十年にかけて建築せるものなり。例に依つて有名なる學者の彫像、及び肖像は、殆ど全壁に充てり。此にも古きは十世紀以下の書數萬卷を以つて埋めらる。此の他大小の圖書館所々に設置せられ、孰れも閲覧自由なり。素より男女の隔をなさず。

閲覧を請ふ時には受付に至りて、その旨をいへば、掛員一枚の示紙を授く、受けて自分の姓名と住所とを記し、彼のカルト目錄に依て借らんと思ふ書名と番號とを記して差し出せば、掛員は迅速に之を貸し與ふ。その閲覧室には長大の卓子所々に据えられ、椅子あり、墨池あり、筆あり、冬は暖く夏は涼しく、夜に入れば、銘々の席に電燈をさへ裝置しあれば、家に居るごとき思ひして讀み味ふを得べし。加之すかゝる室には、必ず天井及び四方には、古今學者の肖像及び事蹟を畫きたるが常なれば、讀み倦みたる時は頭を擧げて是等の名士の昔を忍び、是等の學者と相見ることをも得べし。

書類は數十丈の高きより、數十丈の低きに至れるが、一種の自動機にて、上下するやうになりをれば、何の煩ひもなく、瞬間にして、數多の書を出納することを得。

閲覧中は、音讀を爲さゞるは無論の事にして、數千の人相集まれるも、互に靜肅を守りて、咳拂ひさへ心を用ひをれば、聊も騒がしき事なし。たゞをり〳〵鉛筆削る音の、耳を襲ふあるのみ。

その國有大圖書館には、日本及び支那の書も頗る多し。たゞ是等は動もすれば、その索引不完全にして、吾人の意を充すこと能はざるものあるはくちをし。これ此國にては、必ずしも讀まんとにはあらで、一の珍奇物東洋書籍の見本として蒐めおくものなるにもよるべし。

寺院

佛國には三つの公認敎あり。カトリック敎（羅馬舊敎）プロテスタン敎（新敎）猶太敎なり。この中にカトリック敎最も多數を占む。その敎部は文部に屬し、大僧正、僧正、僧都、副僧都等の職ありて、以て敎化を掌れり。

巴里なる舊敎の本山をノートルダームといふ寺はイールドラシテーといひて、セイヌ川の中島に在り。聖路易島と相對し、巴里府廳と川をへだてゝ相むかへり。これ即ち巴里根源の地にして、古へゴーロツ人の住みし地といふ。この寺は一千百六十三年の創立にして、十三世紀に至りて成功せりとぞ。ゴチック式の建築にして、高さ六十八メートル、市中の偉觀なり。彫刻といひ、壁畫といひ、古色蒼然として、羅馬の舊寺を見るがごとし。帽を脫して門を入れば、大なる貝形の水盤あり。この水を指に受け、我が胸に十字を畫きて進みすゝめば、奥殿に佛壇あり。一丈有餘の白蠟燭にその光を放ち、梁塵をしつむる音樂は、讃美歌と共に響き、數千の善男善女は、孰れも椅子に跪きて、信を凝らせり。四方の壁には宗敎に緣深き歷史畫を畫かき所々に敎祖を祀り、又いはゆる懺悔の小舍を立てたり。これは信徒の面々、此に入りて、過ち犯したる罪障を懺悔する處にして、之を聽く僧侶も言ふ人も、その顏色は互に見えざるやうに構成せり。その他獻納の函、慈善の函、迷ひ兒の函等いづれも位置好く並べ附けられたり。又別に寶庫あり。こゝには、佛國王家代々の喜捨物等いはれつきの物多き中に、奈破翁一世の外套もあり。三百九十七階の高樓に昇りて、四方を見やれば、市の全體一目に入りてセイヌ川帶の如くに流れ、古今の盛衰さへ思ひ起されぬ。こゝは即ち巴里の中央にして、當國里程の元標たること、恰も東京の日本橋のごとし。この寺につゞきてパルヴイの廣場あり。查理曼大帝騎馬の像を置きたり。

プラスド・ラロンコルドの北に高く太く立てられたるをマドレーヌと云ふ舊敎の大寺なり。一千七百六十四年の創立にして、一千八百四十二年に成功せるものとぞ。初め奈破翁一世は、殉國の志士の招魂寺とし、又路易十八世は、路易十六世及

びその皇后の追善供養の寺とせん計畫なりしも、共にその事成らずして一の大寺として崇めらるゝに至れり。かゝればノートルダームにつきて大法會大禮式等は、大かたこゝに於てする例なり。

サクレクールは、巴里市中最も高燥の地にして、最も宏大なる寺院なり。建築の式は羅馬ビーザンチーンにして、一千八百九十一年の創立にかゝり、昨年に至りて、漸く足場を脱せり。市の東北に位し、遠くより望めば、さながら東京駿河臺のニコライ堂のごとし。

其の他大中小の寺院は、一町一街に必ず設けられざるはなし。いづれも、その內部裝置は、ノートルダーム寺と相似たり。

英米等に比べては、當國は宗教心に冷かなりとはいへども、一たび寺院に入れば、その信仰の熱心なる輕ずべからざるものあり。彼等は葬祭は云ふまでもなく、婚姻もこゝに於てし、日曜休日等の說教日には、寺門に市を爲し、參詣人は數十町につゞけり。或る人の說に日本の寺院は、その所在地に入れば既に神聖なり、西洋の寺院は、內に入りて初て神聖をおぼゆといへり。これ我が國のは初より脫俗を主とし、彼の國のは俗人を感化するを主とせれば、此の結果を生ぜしなるべし。

彼等は久しき以來の習慣として、社會の體面、一個人の道德、多くは寺門に養はれたり。されば今に於ては、寺院は實に人民の生命なり、倫理の源泉なり。一片の理論に依て、排斥せられ得べきものにあらず。新教の佛國に行はれざるは、歷史上の原因もあれども、一は理論にのみ傾きて、その儀式等の壯嚴ならざるものの多きにも由れりといふ。世に宗教の必要を說いて、偶像禮拜を罵るものは、一を知りて二を知らざる者といふべし。考へざるべけんや。

墓地

墓地のことを叙するにあたりて、先づいふべきことあり。他にあらず、那破翁一世の陵墓及び國葬寺パンテオンの事なり。

一世は一千八百二十一年セントヘレナ島にて歿せしが、その時遺言して、余が死

次は余が最も鍾愛する佛蘭民の住する中央なる、セイヌ川の邊に埋めんことを願ふといへる辭に本づきて、同四十年巴里アンヴアリード寺院の中央圓塔の下に遷し埋めたり。その墓の全體の建築は羅馬の人ヴイスコンテーの設計にかゝれりといふ。墓の高さ五十メートル、幅四メートル、長さ四メートル、上段二メートル、フインランド產の絳紅色の大理石を以て、古風なる長方形に築き成したり。そのさまさながら枕を置きたるがごとし。舗石はモザイックにして、月桂冠をあらはし、又その戰勝の地名即ちリボリー、ピイラミッド、マレンゴー、オーステルリッツ、イエナ、フリードランド、ワグラム、モスクワ等の文字を嵌入せり。又各地にて分捕せし旗六十旒をその四方に差し立てあり。この圓塔の頂上には蔽ふに金色の王冠形を以てし、正門は鐵柵にて結ひ廻らし、後方は兵器博物館につゞきたり。墓を守れるものは、軍人の老いて退職せるものとおぼしく、襟に勳章を帶びざるはなし。參詣の人々は門を入れば必ず脫帽し、杖傘なども預けて徐に進み彼の墓石を上より見卸しつゝ拜し合へり。思へば奈破崙三世セダンの敗績以後、帝の血統は再び佛國の政權を握ること能はざるに至りしかども、今も猶國民の忘れんとして忘るゝこと能はざるは、帝の盛德大業なり。

　塞納川かへらぬ水に影見えて
　　昔しゆかしき王冠の塔

拿一世皇帝永眠宮廟門有題詞曰、Je Désire que mes cendres reposent sur les bords de la Seine au milieu de ce peuple français que J'ai tant aimé, 一誦三嘆、不覺潸然泣下

（日　南）

國葬寺パンテオンは羅甸街に在り。こは羅馬のサンピエール、倫敦のセントポールの類にして、十八世紀の名技師スーフロー氏の建築せるものなり。もとは加特力宗の寺院なりしを、後に國葬寺と改めたり。

寺の形は希臘式にして、高さ八十三メートル、側面百十二メートル、前面八十四メートル、後面二十三メートルといふ。正面の破風の下の彫刻は、自由保護の神像にして、そのやゝ下に、Aux grand hommes la patrie reconnaissante の數字を刻記せり。門

をくゞりて中に入れば、正面にモザイツクにて畫き成されたるは基督の像にして、右はサントゼネーブ、左はジヤンヌダルクなり。四方の壁には、悉く宗教に關する史話を畫かき成せり。そのいはゆる國葬せられたる人々の墓は、いづれも床下なり。小さき入口より、階を降りてゆきゆけば、數多の英雄は、悉く寢棺にて祭り据ゑられたり。その位の如何と、境遇の如何とを問はず、文に武に、佛國の爲に盡しゝ豪傑は、大方此處に葬られたり。是れ我が國の招魂社と、やゝその趣を一にするものなり。嗚呼人として誰か名譽心なきものあらん、名譽心は人をして事を成さしむる本なり。國士として國に報し、死して後國葬の禮を受るは、この上もなき名譽といふべし。パンテオンの主旨誰か賛成せざらんや。

巴里にて墳墓の最も大なるをペールラセーズといふ。府の東方に在り。四十四エクターの地を宛られたり。こゝは路易十四世のゼジユイツトの懺悔僧ラセーズの住家なりしを、千八百四年に市より購求して、共同墓地とせしより、その名もペールラセーズといへり。

墓所は石塀を以て四方を圍み、所々にいかめしき鐵門立をてれり。入りゆけば、道は縱橫に分れて、數多の墓は、その兩側に列を成したり。この地もとより丘陵なれば、爪先上りにすゝむやうになれるが、寺院はその頂に立ちたり。この寺院の右に有名なりし大統領チエール氏の廟あり。是を第一の壯觀として、處々の廣場及び四辻等には、某々氏の彫像及び碑石等あり。一般の墓標は十字を象れるもあり、その亡者の像を彫刻せるもあり、或は佛像或は聖僧又は神女等を刻み成せるもあり。孰れも石造の寢棺にして、我が國のごとく、土中深く埋むることはあらず。一人ごとに墓標を立てたるは、やゝ知名の人士にして、大方は一家にて一小廟を築き成もたるが、その廟の中央には、祭壇を構へて、亡者の肖像を揭げ、香花を供へたるも見ゆ。形見こそ今はあだなれといひしごとく、彫刻或は油畫等にて、その人の今はの際などありありと顯はし成せるは、緣遠き我々も、何となく淚こぼるゝ心ちす。ラフオンテーヌ、モリエールも此に移し葬られ、カシミールペリエ、又ダントンなど有名の人々數へ盡されず。たゞ奈翁の武將たりしネイ將軍の墓の、いと憐れな

りしには、思はず袖を濕したり。

花は環球の狀をなせる造りもの及び生花とり〴〵なり。これには我が父の爲に、我が母の爲になど、題字又は絹紙等に書き結び付けて手むけたるが多し。中には大なる鉢植を數多墓前に供へ、又やゝ打開ける地には、小花壇を築きなしたるもあり。參詣人は男女ともに、眞摯に端々として徐歩しゆくいと殊勝なり。殊に墓地に入りては聲高に物いはず、烟草をくゆらさゞるなど、禮ありといふべし。まして供へたる花を手折り、墓石を打たゝくやうなる擧動あるべくもあらず。

之に次ぐものをモンマルトルとなす。巴里市の北に在り。その面積殆どペールラセーズの半に過ぐ。史家アンリーマルタンの墓また佛語大辭典の著者として有名なるピエールクローズの墓など此に在り。次にモンパルナスといふあり。市の南に在り。モンマルトルより稍小なり。アレキサンドルヂューマフヒースは、ダームオーカメリヤの劇にてなつかしきまゝに、その墓に詣でたり。この三つを重なる共同墓地とす。恰も東京の青山、谷中、雜司ケ谷といふがごとし。文武諸將にわたりて知名の人の墓は、大方この三ケ所にありて、その構造は悉く同式なり。

每年十一月一日二日は、各墓所にて魂祭あり。佛語にて之をラ、ツーセント、エ、デモドルといふ。我が國の盂蘭盆のごとし。ごはもと二つの祭なりしを、大革命以來一つに合せたりとぞ。土地の人は單にツーセンとのみいへり。

この日はペールラセーズのみにて、一日に十萬人參詣すといひ、他を合すれば二十萬人に上ること珍らしからずとぞ。余が卅一年の十一月に詣りし時は、總計八萬八百十人ありき。この祭日中は、汽車汽船とも割引するほどにて、地方より見物に來るもの、素より多し。かゝれば當日は墓邊二三町は、花屋の臨時店相つゞき、馬車は五六町前より通行を禁ぜらる。かゝる雜沓なれども、例の靜々肅々として絕えて爭ひがましきことなきは、いづれも墓參者なればなり。亦殊勝の俗ならずや。されども人の話に、良地は富者に兼併せられ、貧者はやうやうその所有地だに失はれゆかんとすといへり。世界金權の勢力は、既に三途の川をも押しわたりて、冥府を統御するに至る、うたてき事かな。

リュクサンブール公園

公園

土地廣く人家稀なる地にては、敢て公園の要あらざれども、歐羅巴の都府の如く、人口稠密家屋櫛比する處にありては、必ず公園の設なからざるべからず。公園は實に都人の生命なり、殊に巴里倫敦等に於てその必要を見る。

巴里の公園の最も大なるをボアードブーローニュといふ、市の西方に位せり。その面積我が一里四方にあまれり。古へはマドリッド、及びラミユエット、バガテールなどいふ人の城廓あり、又アペイド、ロンシャンといふ守觀などもありて、おのづから一つの清遊の地たりしが、一千八百五十二年に、時の政府より擧て市に讓與したり。市は此に於て五百萬法の金を費して、池を穿ち道路を修め森林を殖へ、今の如く最も快樂に、最も清潔なる一大公園となしたり。

正門はいかめしき鐵欄より成り、柱上には鍍金を施し、四方には土塀を築きて、自づから一廓を成したり。園中の道路は四通八達にして、わざと木道石道を用ひず、

天然の土を突き堅め、又處々に小砂及び軟土を以て騎馬道を開きたり。全體はマルニエー及び雜木の森にして、處々に松林あり、又大芝生あり、池あり、中島あり、人造の瀧あり、休息店料理店あり、音樂堂あり、花壇あり。かゝれば常に熱鬧の間に生活する巴里人は、暇あるごとに必ずこの地に遊ばざるはなし。その所謂森林は數十町相續きて、雜木奇花相まじえ、虫鳴き鳥囀つり、恰も深山にあるがごとし。その芝生はガーゾンといひて霜おけども、その色をかへざるが、目も及ばぬばかりに續きたる、常に絨氈を敷きたるが如く、花壇のモザイック風なるは、名手の畫ける大和を見るやうなり。その池にはボートレースを試むる男女のむれもあれば、あまた浮べる艇舫に向つて餌を與へつゝ悦ふ幼童もあり。この鳥どもは馴れに馴れて、足下までより來て、人と相語らへるが如きは、友を萬物の靈に求むるにやとおもしろし。

夕風すゞしく月清きに、所々の音樂の響流るゝやうに耳に和するに、相親しめる友とち三三五五語ひ合へるなど、いかで心も澄まざらん、殊に我が國にまさりて

最も心地よきは、夏の夜も猶蚊蟲の居らぬこそなり、更闌るまで、芝生の上森の下陰などにはらばひもこよふも、何の咎せらるゝこともなし。さればにや數多の巴里人は、その老若と男女とをとはず、こゝかしこに群かり集ひて、夜の更くるも知らで興じ合へるよ。

花は四時その匂ひを改めず、月と雲との眺めもまたこゝにおいてせるが、その中にも夏の日の巴里人の生活は、殆どその半をこの地におくるを例とせり。朝とく起きて馬、自轉車、または馬車にて乘廻はすもあり、夕へ〳〵には相携へて遊ぶもあり。辨當輕げに提げゆきて、終日樹陰に遊戯を試むる少女がともゝあれば、芝生の上に足さし伸ばし、何くれの新聞雜誌など讀みあへる童男のむれもあり。日曜休日等は、一家族打つれて遊びくらすもの、森の木の葉よりも多し。

年ごとの大競馬も、この公園につゞきたるロンシャンの廣野にて行はれ、また都人の最も風流を競ふ春季の花戰てふ遊びも、この地にて行はる。

大競馬は、二十五萬法より四五十萬法をかけて行ふものにして、毎年六月十一日なり。この日は世界各國より馬を出し、その騎手も精選して、競走せしむれば、その騷き大方ならず。公園近傍は人波をうつて、とざまかうざまに走り廻れば、その響き潮のよするが如し。いはゆる競馬場には埒を設け門を立てゝ、濫りに人を入れしめず。馬見所は一壇高く築き成されたるが、これに入らんには、少くも一人前金拾圓內外を要す。たゞ塲內に入るのみにても、猶四五十錢を投せざるべからず。されども、さばかりの事に躊躇すべくもあらず、けふはいかに節儉の佛國民も、先を爭うて入場し、競走の初まる頃になりては、家も野も人もて埋めらるゝに至りぬ。この日は大統領も來場する例なれば、その護衞として、各種の騎兵憲兵巡查等いづれも着飾りて幾重にも立塞かりたる、きらびやかに勇まし。されば競馬のみならず、是等のありさまをも觀んとて、來り集まるもの、また山を成せり。その競馬は午後三時にはじまり、五時に終る例なるが、騎手には赤青紫白等の服裝せしめて、見る人の目を慥かならしめ、又番のかはるごとに、鐘を鳴らしなどすること、總て我が國に行ふと同じ。その競走の間は、杖を擧げ帽を振り、赤と呼び白と叫ぶ等の

俗も、また東西の別あらず。その最も熱に力を入れ、足踏みをさへして力味合へるは、必ず金を賭したるものにして、この時間に千金を獲んといらだてる者なり。そも〳〵巴里人が上下擧つて狂奔する祭禮騒ぎ等の多き中に、競馬のごとく人氣あるものはあらず。日曜より土曜に至るまで、巴里市中に競馬のなき日はあらず。されば競馬専門の新聞もあり、競馬場行きの乗合馬車もあり、これたゞに馬匹の品評騎手の如何をいふにあらず、之に狂し之に熱するものは、その懐中に影響すること多かればなり。されば一度の競馬に高金を獲る幸福者もあれば、一時間に家産を倒す不幸者も少からず。然れども政府は猶之を奨励し、之を保護せり。

花戦は六月四五日の候この公園の一隅にて行はる。此の日場内には桁々に綱を張りて、三色旗及び各國旗を飾り、樂隊は處々に群居して絶えず合奏す。この樂しげなる場裏に、巴里人のパリ・・は、衣裳より馬車に至るまで有るに従つて用ふるにはあらで、あらん限りの風流を盡して四方より押し寄するなり。この車にはあまたの花を貯へ、此彼の別無く、その行きずりに互に拋け合ふを樂しみとす。その花は時知りがほに匂ひ出てたる石竹、薔薇、小菊、撫子、菖蒲などの類にて、孰れも一束壹圓内外のものならざるはなし。かゝれば、この遊は貴族豪家の人ならでは爲す能はず。一般の人は、その戰場の兩側に八重垣なして、たゞ品評し合ふのみ。その車は四頭曳き六頭曳きなるが多く、手綱より腹帶に至るまで花をかざりつけ、その車の輪をも同じさまに裝ひたてたる、そのめざましさいふべからず。それだにあるを、更に燕尾形の赤旗白旗、さては紫の旗など押したて、車の四方に色絹をさへ取付け、乗れる女の裳の裾長う打垂らしたるなど、我が王朝時代の出衣の風流さへ忍び出でられぬ。車の數は何千輛と數へらるゝに、殊更に七八人相乗して花打散らしつゝ馳違ふたはれをたはれめの群れもあり、又は殊更に驢馬の小さきに花車曳かせつゝ追ひゆく風流士もあり。戰は大方午後三四時頃よりはじまりて七時過に至りて了る習ひなるが、戰場は見るまに花氈を敷きたるやうにぞなりゆく。

此の日は、かく花のいろ〳〵を拋ちて風流を競ふのみにあらず、女子はことにそ

の服装の新意匠にて勝を制せんとするものあり。これ當日最も目立しものは、やがて世界婦人の服装の淵となることも多かればなり。又その車の裝ひのごときも、たゞに一日の樂しみのみにあらず、審査掛ありて、その意匠の上乘なるものは、賭にて褒賞を與ふる習ひなりとぞ。

この遊戯はもと伊太利におこり、佛國の南方にうつり來しが、近年巴里の俗となれりといふ。されども貴族豪家ならでは、容易く行ひがたきものなれば、彼のカルナバル、ミカレームの時なるロンフェッチーの戰のごとく盛ならず。さまれかくまれ、我利々々主義の天地に於て、かゝるやさしき遊戯の行はるゝは、衣食足りて風流を知る習ひにやと、人の住む國は猶賴もしくぞおもはるゝ。

咲にほふ人の心の花車
　　ゆくもかへるもおもしろの世や

ジャルダン、ダアックリマタシヨン。　ジャルダンは庭園なり、その目的バルク即ち公園と異なり。この庭園はボアー大公園の一部分にして、その面積凡そ二十エクタークルあり。こゝには最も珍らしく最も愉快に最も新奇なる異獸異木異草等を移し植ゑて、佛國の土地に慣れしめん爲に開きたる處なり。されば印度、埃及等の暖國のものより、北氷洋の產物又は東南洋諸島のものまでも蒐集し、動物植物と大別し、更に幾多にも分類して、それ〳〵に所を得しめたる、一週すれば世界中の動植物の大方を見知らるべし。その温室のごときは、頗る宏大にして、數十丈の棕櫚椰子など立榮えたるに、その地には苔生し蘭匂ひ、短竹の生ひ茂れるなど、恰も暖國の地を踏むがごとし。動物園は虎は虎、獅子は獅子と、剝製を扱ふごとき奇法を用ひず、いづれもそのものゝ生存せる周圍の狀をもあらはしたれば、見る人も大にその智を增し、住む者も必しも牢舍に在るごとき思ひするも少かるべし。例へば一匹の狐あらんには、その狐の山にありて住むらんさまに作りなし、一つのオットセーあらんには、それが住める水邊の狀をも作りそへて、觀覧に供ふるがごとし。この方法は、こゝのみならず歐米各國の博物館動物園等皆均し。この國は廣く清く心ちよきまゝに、巴里人の散步するもの常に絶えず。されば皆

樂堂もあり、小博物館もあり、休息所料理店あり。また臨時に芝居などをも催すこともあり、或は大象大駝鳥大駱駝等に車をひかせ、或は鞍をおきて望みのまゝに乘せあるき歩きあるくなど、珍らしからずや。この園中には簡單なる馬車鐵道ありて、強て足を勞せずとも、運動し得るやうになり居れば、老人も小供も半病人も、來り遊ぶに苦ならず。花匂ひ風柔かなる日影に、金色白顏の男女の小供等、彼の象に乘り駝鳥に引かれつゝ步み合へるに、麒麟のみのが住む屋の杆をも越えて見おろせるさまなど、眺めあくべくもあらず。まして風船高う揚り、樂の音さや〳〵と風に響き合へるあるをや。

リユクサンブール公園。　ソルボンヌの塔上、青炎の光輝くあたりに一大公園あり。リユクサンブールといふ。その面積我が上野公園よりやゝ小なり。しかれども池ありて、噴水常に絶えず、花壇ありて百芳相競ひ、森繁り細草清く、眞に美術園の觀あり。五洲を表せる銅造の大彫刻は、噴水飛沫の間にありて、遙に天文臺と相對し、文武英雄豪傑の彫像は、花卉の間に聳え立ちて、人を呼ぶものゝ如し。この邊は學生の巣窟ともいふべき處なれば、朝に夕に青年の運動場遊戲場となりて、森の雀はユゴーの詩を誦し、芝の鳩はマルセーエーズをや囀つるらんとぞおぼゆる。道の爽しきは到る處同じやうなれども、この園中は殊に清ければ、少女が獨步も心配なかるべし。

こゝには貴族院あり。こはもとリユクサンブール宮といひて、顯理四世の寡后マリードメヂシーの爲に造られたりしものなり。又當世名家の傑作を陳列せる繪畫彫刻の博物館あり。かゝれば、たゞに公園に清凉の空氣を吸ふのみならず、かゝる見物をもかねて出入するもの絶ゆる暇なし。

ビユットセクモン公園。　市の東方の一大公園なり。このわたり職工多く、人がらよからず。こは奈破翁三世、一千八百萬法を費して築造せるものにして、專ら職工等の遊戲場にあてたり。そも〳〵大方の公園は、四方鐵柵にして、園池は平なるをこゝのみは山あり、巖あり、細道あり、絶壁あり、斷巖あり、或は老樹枝を交へ、或は瀑布數十丈の高きより落つ橋あり水清く池あり舟うかべり、或は絕頂に東屋を

かこし或は巖を穿ちて胎内くゞりの狀をなす。かゝればこの公園は他とその趣を異にし、高低あり、凸凹あり、巖岸奇石東洋山水の趣を備へたり。然れども靜かに觀れば、この深き池、この高き山、この恐しき巖、この落つる瀑布悉く人造ならざるはなし。また驚くべからずや。

モンソー公園。　凱旋門を去りて北にゆくこと數丁の處にあり。リユクサンブール公園と南北に相對したる觀あり。このわたり紳士の住宅多く、從つて之に出入するものは大に聖旬街と趣を異にせり。彫像及び古建築の柱石あり。老樹さかえ細葉繁り、リユクサンブールに比すれば、やゝ幽邃なり。彼は春の如く、是は秋のごとく、彼は若く是は老いたり。その艷麗なるは彼に劣るべきも、その高深なるは彼に優れるものあらん。此の園につゞきてセルニユスキー博物館あり。專ら東洋諸國の宗教具工藝品を蒐集したり。我が國の物も頗る多し。

東方にありて、最も大なる公園をボアードウァンセンヌといふ。ボアードブーローニユと巴里市を隔てゝ相對せり。ヴアンセンヌは恰も我が東京の本所深川の如く、市の中央とやゝ隔りて、おのづから一區劃をなし、人口殆ど二萬八千餘を有せり。この公園は例によりて、花匂ひ鳥囀り、別に一天地を開きたり。サンマンデの池、シヤラントンの池あり。また宏大なる競馬場あり。そも〳〵巴里の地、その東南隅は西北隅より淋しく人氣わるし。されば、この大公園のごときも、ボアーのごとく紳士淑女の出入少く、いはゞやゝ下賤の者の打休らふ處なり。

東南に植物園の遊歩場あり。中央にチユイルリー公園あり。植物園は聖旬街につゞきて博物學の博物館あり。チユルリーはルーブル宮殿につゞきて昔のチユルリー宮殿の跡なり。孰れも巴里人の最も好んで散步する地たり。その他パッレー、パレーロアイヤール等小公園は到る處に必ず設けられたるが、二六時中人跡の絕ゆることあらず。これ共同生活たる巴里人の自然の結果として、公園は實に彼等の生命なり。

かゝれば各公園に於る裝飾設備至らざることなく、あらゆる快樂は、此の國中に於てし、南と北に談笑せんことを務め合へり。競馬、烟火、運動會、狂言、音樂、展覽會等

の類常に絶ゆる間なし、殊に日曜及び木曜日には各公園にて傍聽無料の軍樂を行ふ。この日には數十人の軍隊、音樂堂に上りて奏し初れば、滿都の士女、雲のごとくに集まりて之を傍聽す。或はその歌曲の優美なる、或は男壯なる、緩急抑揚能く律に適ひ、暫しは人事を忘るゝに至る。之に付て嘗て文あれば、此に附記すべし。こは一千八百九十九年八月十日の記なり。

公園軍樂

共和紀念大祭過ぎしより、巴里人の大半は或は温泉場に、或は海水浴にと出でゆきけり。さはれ米國、英國等より、又來遊するもの多ければ、更に寂寞を覺ゆるほどの事はあらず、况て中產以下の人は、避暑の旅行などすべくもあらねば、各休日に於る各公園の賑合は、平常に比して少しも劣ることもなし。されば手踊小芝居等人をして慰ましむるもの等多き中に軍隊音樂といふものこそその音殊に高くはきこゆれ。こは日曜及び木曜の午後巴里の各公園にて行はるゝものにて傍聽無料の制度なれば、その繁盛夥し。一日余はチュイルリー公園に出でゆきぬ。こゝは古へチュイルリー宮殿の在りし跡にて、市の中央の一大公園なれば、常にても人の來遊するもの多きに、けふは軍樂ありといへば、着きし頃は、殆と人もて山を築き成せり。樹葉の蔭深く、噴水は數丈の高きに上り居れば、夏とはいへど、更に暑しとも思はれず、樂隊は園中の最も打開けたる場所を占めて既う奏し初めたり。數千の椅子は、一の空きも無きのみならず、遲れ來りし人々は、幾重にも〱取卷き、すこしにても見ばやと爪立ち伸び上りなどせる、その雜沓甚だし。

群集せるものは、男女五分々々なれども、女は例の花帽子を戴きたれば、その數多きやうに思はれ、高き所より見下せば、菊の山などを見るやうなり。

樂隊は指揮官の鞭のまに〱或は高く或は短く、或は緩く或は急に、歌と樂と相和し、人をしておのづから舞ひ起たしむ。今日は伴はれ來れる犬も、尾を垂れて之を聞き、樹に住める鳩雀も、翼を收めて眠に入りたり。この事のせめて面白かりければ、余は之を初として屢ゝ行きたりしが、最も壯快に覺えしは、

カン、メーム……………デジー氏作
レ、ドラコン、ドビルラール……………ソーラルト氏作
オーザルメ……………ボース氏作
マルシユ、ローレアンヌ……………ゴレフウエー氏作
ファレヨダ……………リウサル氏作
サンチアゴー……………コルピユー氏作
オンスール、エ、パトリー……………パレッス氏作

是等の歌曲は、故きあり新しきあり、各終るごとに拍手喝采は、常にして、手を擧て躍り出でんとするものあり椅子をうつて大聲をあぐるあり。かくて樂の最終には、必ずマルセーエーズを奏す、此に至れば小供走り老人飛び百萬の大數も何かはといふ面魂少女の細筋にもよまるべし。又最も流麗に感ぜしは、

ロエン、グラン……………ウエーナー氏作
カルマン……………ラジユット氏作
ル、ロアー、ド、ラナール……………アッセナル氏作
サムソン、エ、ダリア……………セーントセース氏作
ウエルテール……………マッシー氏作
ラフリカンヌ……………チャーピール氏作

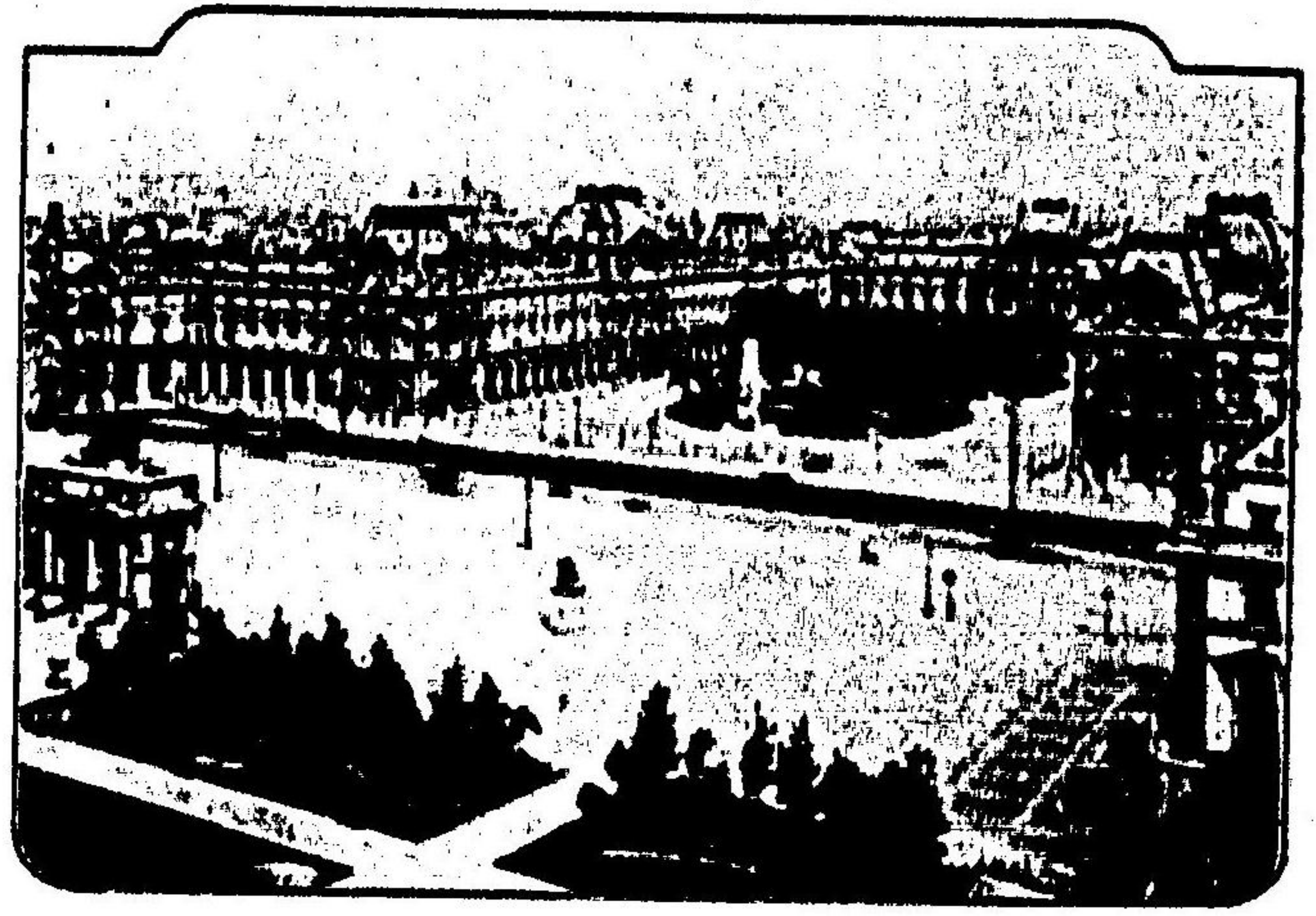
等なり、先きのは男士の劍を擬つて虎を斬るが如く、これは少女の露を厭ひて花を折るが如し、若し當國の魂となり、當國の人と爲りて、是等の音樂を聞かば、實にその味ひ食を忘るゝに至るべし。

當國の人民が社會教育に力を盡すことと感ずべきが多き中に、此公園軍樂のごときは、最も良法といふべし、音樂堂等に於てすれば、自ら費用も多かるべく、從つて一般人民に快く傍聽せしむると能はざる場合あり。然るに公園は出づるにも入るにも、金の入るべき要なく、加之ず空氣清涼にして、室内に群居するごとき不衛生の事もなし。かゝれば六七階の上層なる族すが如き處に、天井裏のごとく住へるものも、今日はこの木陰に休みがてら微妙の音樂を聞くを得べ

く、音樂を聞くと共に、生計にのみ頭を惱まし居るものも、俄に天國に生じたるが如く、又俄に闘士を以て任ぜざるべからざるがごとき感をも生ずべし。是れ實に人をして元氣を付けしめ、人をして奮起せしめ、人をして高尚ならしめ、人をして餘裕あらしむるとを救ふるに、最も缺く可らざるものならずや。無論如何なる高貴の人も、如何なる富豪の徒も、公園なれば、すこしも憚るとなし、されば二頭四頭の馬車にて來り集まるものもあれば、汗水滴らして跣に馳ち來るもあり。けふは上下共に喜び貧富等しく談笑す、公園軍樂の制それよからずや。

博物館

博物館の國家社會に大効あることは、今更に言ふを要せじ。巴里にて最も大なるものをルーブル博物館とす。市の中央チュイルリー公園に續きて、塞納川邊に在り。こはもと佛國王家の代々の宮殿なりしを、近世博物館とせしものなり。その建築の大方は、路易十四世の朝に成りしものにて、奈破翁一世に至りて更に修造し、同三世の時大に増築して、チュイルリー宮殿に續けたり。かゝりければ三世以前の部分を舊ルーブルといひ、三世以後のを新ルーブルといふ。今は共に合せて一大博物館とせり。館内は彫刻、繪畫、發掘品、陶漆器、寶玉、船舶、文具、武具、調度等の數類に分ち、更に古代埃及、古代亞細亞及び東南洋諸國風俗室を設け、あらゆる物品を蒐集せり。中にも彫刻繪畫は最もこの館の光榮を放つものにして、その彫刻は希臘羅馬の古物及びその摸造、又は中興時代より十七八世紀に至る、異常健雅なるもの、備はらざるはなし。されば、この部に入れば、いはゆるミトロジーに關するものは云ふも更なり、古代の帝王將相名人の彫像にも接することを得べく、又近古の名工が手たれの技をも親しく見るを得べし。繪畫も古代中代近代に大別し、更に伊太利派、和蘭派、フラマン派、西班牙派、獨逸派、英國派、佛國派等の流派によりて蒐集せる、その大額凡そ二千五百點以上に達せり。いづれも天下一品と推さるゝものにして、その價何百萬と數へらる。この部には、別に畫人の肖像室あり。本部に陳列せる名工の畫像なり。彼是合せ見れば、更に妙味を感ずること多し。又下[illegible]



ルーヴル博物館

室あり。こゝには伊太利の古名人以來の分を蒐集せる、その趣味少からず。

概して之を言へば、本館の繪畫は宗教畫最も多く、戰爭畫之に次ぎ、人物風俗景色畫之に從ふ。これ宗教戰爭等は、古人の筆跡多きが故にもあるべし。

館の中央にガルリーダポロンといふ室あり。最も美を極めたり。顯理四世路易十四世など、深く意を用ひし處にして、現在の裝飾はルブランの圖案に成れりといふ。この室の四壁には、織物にて帝王將相の像をあらはし、中央には歷代の寶器調度を陳列せり。中にも奈破翁一世の査理曼大帝の王冠に擬して作れりといふ寶冠、又軍劍及び時計等は、四方に照り徹るまで金剛石をもて裝飾したる。全歐洲の大帝を以て任じたる抱負のほど仰望するに餘りあり。かゝる貴重品なるにより、この物のみは別に一室を爲し、勳章を帶せる武官をして護衛せしめたり。

發掘物中にて最も目にとゞまるものは、埃及または亞西利邊の古代墓石古佛像の類なり。例の象形文字を彫りつけたる棺槨ミイラ等は言ふまでもなく、小亞細亞邊よりあまた掘出したる半獸半人の大々彫刻の如きに至りては、實に腦を塞からしむるもの少からず。これらは奈破翁一世が埃及征討の時持かへりしもの多しとぞ。その祭品調度、小佛、武具の類に至るまで打かたぶかるゝものゝみ。風俗調度部の中に我が國古今の風俗もあらはしたり。いかゞしく陳せらるゝも少からざれども、大體に於て誤多しとはいふべからず。その船舶部には、古今船舶の雛形を歷史的に陳列し、武具部も同じく沿革的に陳列せり。

之を要するに、本館の主たるものは彫刻繪畫にあり。就中繪畫に在り。されば ルー

ブルといへば、世界の人々何となく古代の名畫を聯想するに至れるも故あり。天下の大美術國を以て任ずるものは、かゝる大設計の美術館を有するも、また自然の結果なるべし。

リュクサンブール博物館。　さきに記しゝリュクサンブール公園中に在り。こは繪畫及び彫刻のみにして、佛國現時知名の人々にかぎりて陳列せり。畫題は比較的に古代神話少く、歴史、風俗、景色、肖像畫等多し。彫刻は希臘羅馬の昔をおへるものあり、意匠全く嶄新なるあり、大理石若くは銅をもて造らる。

本館に陳列せられたる物は、その人死して二十年間は猶此に掲げて輿論の批評を乞ひ、論定まりて後ルーブル館に移す定めといふ。かゝれば本館は、佛國美術の中心點となりて、世人の目をひくこと少からず。館は甚大ならざれども、能く各種の品目を蒐集せれば、頗る見心地よし。

習慣風俗の異なるに從つて、美を嗜む心のかはりゆくは、當然の理ともいはるべけれど、余輩日本人として此の館に入りてまづ驚かるゝは、その刀その筆の精美なるを味ふ前に、左右前後、見とし見るもの、多くは裸體なる事なり。さるは彫刻部の如きあるは男、あるは女、その一人々々なるさへ苦しき形せるが多かるに、兩々相組で一の雕物となれるがごときは、かくさへ彫られけるよと打眺めらるゝも少からず。繪畫に至りても猶同じ。或は燈くらき帳の前に、赤はだかにて女の打棄れたる、或は寢よげに見ゆる青草の上に、女の仰ぎ臥せる、さては鵞鳥を懐きて睡眠せる、三々五々手つながりして相戯るゝなど、書き立つれば限りもあらず。

そも〳〵古代の彫刻繪畫に裸體の多きは、必ずしも今人の唱ふるが如く、美術論にのみ本づきたるにはあらじ、かの陽國なる希臘羅馬等の自然の風俗に基きたるもあるべしさるを寒國にて猶も務めてそれを學び、常には屋下の見はるゝだに猥褻なりと排斥する社會の習はしなるに、かくしも彫刻繪畫に公然裸肌を附して奬勵するは、恐く温古知新の本意に適ひたりやあらずや、霜白き朝など、延等に向へば、かの「衣かせ山」と古人の詠じけん事さへ思ひ出でらるゝよ。

景色畫は、最も近き年代に發明せられたるものなれば、恐く我が技の上に出たり

とは思はざれども、遠近法よく行屆きて限ざりなされたれば、さながらその野山に在るが如き思ひするもの少からず。ことに阿弗利加の大野、大海の景などに至りては、我が畫師の想像的意匠にまさりて、眼を引かるゝこと多し。

ヴェルサイユ博物館。　本館は巴里を西南に距ること凡そ四里半ばかりの處に在り。嘗て紀行あり。曰く。

野山の景色も春めく頃、同好の友人、福本、岡田の二氏とヴェルサイユの宮殿見むとて出で立つ。時は一千八百九十九年四月十一日午前十時、モムパルナスより汽車に乘りぬ。けふは朝より空かき曇り、雨さへ打しきれば、めづらしき田野の景色も、たゞ窓ごしに見やるのみ。さはれムードン、セーブルあたりは、桃李林檎など、今を盛りに咲き匂へるを、雨ながらに見るもまたおもしろし。

畑の小さく畔を限られて作られたる、鷄家鴨などの心よげに打遊べる、何となく御國の田家の事など思ひよそへらる。菜蔬の類を植ゑ成したる畑には、一畝ごとに玻璃の鉢を蓋ひたるは、霜雪などに當てじとの心入にやとゆかし。志すところは、巴里より地やゝ高し。車のやうやう進むと共に、ふりかへれば、家居畑などの遙に見おろさるゝ、心ちよし。あまたの花どもの中に、櫻はなきやと探さるゝも、年頃御國の春に馴れたる故なるべし。彼の木やさくら、あらず、他の花なりなど、言ひしらふ中に、車ははやくヴェルサイユに着きぬ。時に十一時。

ヴェルサイユの宮殿とは、既に天下に知れわたりたる如く、歐洲中その壯麗殆ど第一に數へらるゝものなり。こゝは本佛國王、及びその王族の遊覧の地にして、早く一小宮を設けたる處なりしが、路易十四世に至り、鉅萬の財を費して、かく大宮殿をおこしたりしなり。十四世は佛國王中の大英雄にして、今に至るまで佛國の全盛は、この朝を推すばかりの勢なれば、その建築の壯大にして、規模の宏遠なること想像の外なり。そのさまは山字形にして、中央高く、左右の翼やゝ低し。柱は大きさ二三人にて相擁くばかりなるが、大方大理石なり。

庭園は石を立て樹を植ゑ池を掘りたる、純粹なる佛國作庭式と、灌木細草植ゑ交へたる、英國作庭法と相半せり。所々に彫刻高く立てられ、池の水は數十丈に迸り

上れるなど心ゆくこと多し。かゝれば庭園のみにても遙々と目の及ばぬばかりに廣きに、更に墻を越えて森叢の間に遠山あらはれ、田野見やらるゝさま、實に歐洲の天地を我が物と思ひなしたりけん十四世が抱負のほど推しはかるに餘りあり。

前に記したるが如く、宮殿は凡そ三つに區劃せらる。中央正殿及び南殿北殿なり。案内書の導くまゝに、我等はまづ北殿より見はじめぬ。

北殿を分ちて、第一史廊、第一彫刻廊、碑碣廊、十字軍室、第二彫刻廊、若士丹丁廊、第二史廊及び上院とす。第一史廊は、第一室より第十二室に至る。是等の室には、法蘭西大帝より路易十六世に至る迄の畫額を掲げたり。大帝の苦戰十四世が南征北伐の當時の狀など、現に目の前に見るがごとし。十字軍室は、分れて一室より五室に至る。附軍慘憺の狀、路易九世が臨終の狀など、人をして思はず涙をふるはしむ。第二史廊は、一室より十室に至る。こは一千七百九十七年より、一千八百三十五年に至る畫額なり。奈破翁三世が事蹟殊に多し。最も見るべきは、若士丹丁廊なり。室は分れて一より七に至る。中につきてオークルヴエルネーが紙に成れる若士丹丁陷落の圖は、三枚續きの大幅なり。之につゞきてアブヂルカヂーが本營占領の圖は、最も人目を引くべし。さるは不意を襲はれて大敗せるありさま、彼の猶太人が、貪慾飽くことなき眼を東西に配りて物を掠奪せるさま、眞に身に寒を生ぜんとす。畫家の畫柄となれるロスチヤイルドの像は、即ちこの中に畫かれたり。此室の畫は、大方横は七八間にも及ぶべく、縱は三四間にも至るべし。

碑碣及び彫刻廊には、古來の帝王將相を始め、英雄豪傑の彫像及び墳墓を雕刻して陳列せれば、こゝのみにても、佛國史中の大人物に接するに餘りあり。

上院は、これよりつゞきたる所にて、本王宮附の劇場たりしなり。されば其の建築も、本殿と異なりて、また一の偉觀なり、と見かう見辛うじて北殿のみを巡りたれば、日は既に暮れぬ。即ち宮の傍なる瑞西旅館といふに宿りぬ。

十二日、けふは昨日見のこしたりし寺院を見る。こも同じく宮殿の中に在りて、ブルボン家諸王の婚祭の禮を擧げし處なり。天井及び四方は神代畫にして、そのき

ちくしさいふやうなし。此處見了りて中央殿に入る。中央殿は最も善美を盡したる所にして、王大廷戰鬪室玻璃廊平和室后大廷后小廷將相室等に區別せらる。王大廷は一室より十室に至る。即ち路易十四世が絶世の驕奢を極めて住みし所なれば、その裝飾の精美なる、萬言萬筆するもいかで言ひつくし書きあらはすことを得む。こゝには專ら十四世に關する繪畫を集めたり。又王の親しく用ひし寢臺調度の類をも陳列せらる。その寢臺は王が崩ぜし時のものにしてその臨なるストーブの上に置時計ありて、針の止まれるは當時自から止まりしまゝなりといひ傳ふ。戰鬪室の天井に畫ける大幅は、十四世自からを畫となし、歐洲各國の王どもが、その威光に打たれて畏服せる狀にして、その志のほど思ひやるに足るべし。玻璃廊といふは、長さ三十餘間に渉りたる大殿にして、四方玻璃を以て之を圍ひ、その莊嚴なること言ふべからず。之につゞきて平和室あり。こは戰鬪室と相對して、平和に關する繪畫を以てせれば、この稱あり。

后大廷といふは、一室より八室に至り、后小廷は一室にして最も廣し。是等の室には、世々の后妃住まはれし所にして、その裝飾の優なる、また一種の趣あり。引れる者、この間は十四世の身まかりし所、かの間は十六世の捕はれし所、あの見ゆる大庭こそ革命軍の寄せ来りし所なれ、ラファイエット將軍はこゝより叫れりなぞ、指さし示すに、いかでそのかみの事思ひ出でざらんや。

ヴェルサイユ宮殿内（ガルリーデバツタイユ）

十三日、起き出でゝ見れば雨ふりて寒し、さはれ今日は悉く見了らんと思へば例刻より更に宮殿に入りぬ。北殿中央殿は既に了りたれば南殿より上る。北部一部を大戰廊といふ國初より今代に至る大

戰の額をかけつらねたり。されば査理曼、顯理四世、路易九世、フランソアー一世などいふ諸帝王の戰爭畫、及び奈破翁一世の有名なるワグラム、オーステリッツ、イエナ、ワーテルローなどの激戰もかゝげらる。この廊なるは、額の大さ孰れも五六間以上なり。將叫び馬勇み、或は斃れ或は傷き、或は進み或は退くさま、さながら實地に在るが如し。

この廊には、その聯ね掲げたる畫中の王公將相を、更に石刻して、各ゝその所々に並べ立てたり。されば畫と合せ見て、その眞像にさへ接することを得べし。

この廊を出づれば、皇帝廊に至る、廊は更に分れて、十三室となれり。こゝには奈破翁一世の像のみを掲げたり。されば帝が東西を伐ち、南北を平ぐる激戰の状は更なり、未だ一將官にて在りし頃より、帝王の位に上り、遂に死に至るまでの肖像をも陳列せらる。そも〳〵帝の像は、十中の九までは戰爭なるに、たま〳〵皇后册立の圖、または一たび流竄せられて、更に島を立出づる圖のごときをも此には掲げ出されたり。その帝王の位に上り、正裝して百官の賀を受る圖のごとき、いかに得意の境遇なりしかを推し測らる。又二世奈破翁即ち第二皇后の腹なる幼子を、羅馬王に封ずるが如き、天地を我が物として、悠々自得せるさま、眞に當日に逢ふがごとし。

これに相對ひて彫刻廊あり。こゝには學者、技術家、ブルボン家諸王族、奈破翁一族等の石刻、壘々として並べ立てらる。されば、苟も歷史にあらはれたるものは、此に入れば直ちにその人に逢ふがごとし。中に就てジョゼフヰーヌが皇后の正裝して、奈破翁の肖像をもてると、第二皇后ルイズマリーの肖像と並べ立てられたるは、當時の事そゞろに思ひ出でられぬ。又ボアロー、ラシーヌ、モリエール、ラフオンテーヌ、ギゾー、ラマルチーヌ、ビクトル、ユゴー等が前に至れば、自から足の動きを覺えしは、この道に心引かるゝ故にや。

この廊を下り引つゞき下院を見る。其の構造の状、我が國の議院に似たり。案内するもの云く、この席はガンベッタ氏の坐せしところ、かの席はチエール氏の坐せしところ、かしこそ議長の出入する口なれ、あの見ゆる所ぞ傍聽席なるなど、指

さし救ふごとゝは革命以後も歴史に因みて大統領選挙の時には國民議會を開くことにして去る二月現大統領の選挙も此にて行はれたり。されば心なき一脚の椅子も、何となく鳥膚立て打守らるゝも、思へば無用の感慨なりけり。

辛うじて宮殿は見了りぬ。日を窮めば午後二時を下れり即ち馬車を命じて、トリアノンに至る。トリアノンとは、路易十四世の離宮の在りし地にして、こゝより七八丁ばかりを隔てたり。この宮は大理石を以て建てられ、今猶存せり。垣間に水清く林野遠くつゞきて、景色いはん方なし。宮殿は二階を設けず、洒落風流に作り成されたるさま、ヴエルサイユの大宮殿に對して、またおもしろし。室内につれられて行くに、十四世が平馴しゝ調度ども、その儘に存せり。こゝには奈破翁一世も暫し住みしことありて、その金装の寝臺も、昔のごとくに据ゑ付られたり。

門を出で傍に車輛室あり。路易十四、十五、十六、路易非布及び奈破翁一世シャル・十世等の用ひし車あり。孰れも金銀を鏤めて、その壯麗目を驚ろかさしむ。この離宮を出ること一、二丁にして更に、小離宮あり。こは路易十六世の皇居マリーアントワネットの殿なり。先の地に比すれば、更に山ふかくして、俗塵を遠かる心地す。こゝには皇后の用ひられしもの頗る多し。然れども、かの大革命は此處までも及びて、金銀を鏤めたる手道具の類ことごとく破毀しあり。今はその片々を取合せて衆庶に縱覽せしむ。中につきて路易十七世の幼時の肖像及び皇后の彫像を劍を以て斬り毀はしたるを又繼ぎ合せたるなどを見れば、いかに革命の當氣の盛なりしかを想像せしむ。之を見るにつけて、我が明治維新の際、各國の神社佛閣を毀ちしことに東照宮の廟を破りし事など思ひ合せらる。この宮も、庭園頗る惜く雅淡なり。佛國風の順序立ちたるものならで、天然を存するを主としたれば、水流れ苔蒸し、大樹小樹枝をまじへて、そのさはやかさいふべからず。ことに湖畔の田舍家をつくり、橋を架し、小亭を設けしなど、東京小石川なる當水戸侯の後樂園の趣あり。櫻もところどころに匂ひ、すみれ、たんぽゝなど、その色を競へり。思はず日本に歸りたるごとき心ちせしかば、園中をも厭はず、草花を摘み櫻をかざしなどして、數時間を費せり。あはれ路易十六世が盛なりし時は、一木一草だに、いかで路易

く人の手をふるゝを許しけん、鳥の聲は無常をかこつに似、水の音は昔日を戀ふるごとくなるも悲し。

雨ます〳〵降りしきれば、出でゝヴェルサイユに向ひ、ジュードポームの盟約室を觀る。本宮殿の傍に在り。もと王の打球場なり。革命の初に當り、上下議員本宮殿に入ることを許されざりしかば、打揃つて此の室に至り、憲法制定せざれば、一歩も退かずと、各々盟約せしところなり。入りて觀るに、時の議長たりしベイリーの彫像は、中央に立てられて、當日の意氣を思ひやらるゝに、更に大額をかゝげて、その議事の狀を寫し出したり。彼のミラボーが拳を握り足を踏張つて、大音聲に呼べるありさま、いま猶耳をうつがごとし。また當日革命黨の連判狀をも陳列せらる。各自の名を自記せるを、一々見もて行くに、覇氣滿々として、おのづから手に汗を握らる。日月と光を爭ふばかりの大宮殿をまのあたり眺み見て、この末路を思ふに、人生の榮たゞ夢の如く、幻のごとし。汽車は五時に巴里をさして出づといへば、數多の感慨をのこして、停車場に馳せつきぬ。家につきしは街の燈かゞやき初むる頃なりき。

カルナバレ博物館。　本館は專ら巴里市の歷史に關する物品を蒐集陳列せり。館は大革命時代に有名の地となりしバスチーユの傍に在り。その建築は十六世紀の物なれば、その門に入り、その物を觀ざる中に、既に歷史的觀念を生ず。まづ大庭に立てられし路易十四世の騎馬の銅像あり。館に入れば、その第一は石器時代なり。野獸の大骨、石劍雷斧の類など並べられたるに、ゴーロワの古へのさま思ひ出でらる。第二第三と中古時代即ち封建時代の室に入れば、又その品々異りて、我が封建の昔思ひ准べらるゝこと多し。中にも古代貨幣及び刀劍甲冑の類、主從相盟約せる儀式具のごとき、讀史家を益すること少からず。王朝時代の室に至りては、押並べて華麗優美、更にまた我が奈良平安の古を思ひつゞくること多し。その服飾の室に入れば、當時宮中にて用ひし男女の裝束具を始め、民間の物に至るまで、順に依て陳列せり。それのみにては飽き足らずとにや、別に裝束人物を畫き又大額にその正裝の圖を書きあらはしたるもあり。

奈破翁帝政時代は別に一區劃を成せり。帝の遺品數多かる中に最も目につきたりしは、軍中用の化粧品及び辨當箱等なり。敢て精巧を盡したりとにはあらねど、帝が親しく用ひられしと思へば、おのづから身の毛たつやうなり。楊枝爪こすり耳かき等に至る迄順序よく列ねられたる、その古びたるもなか〱にゆかし。帝の自筆の書類はいふも更なり、廢后ジョゼフヰーヌの手書もあり、大將ネイの親書もあり。大將ネイといへばその名を聞てだに鬼のごとく思はれければ、筆の跡もいかにおそろしからんと推し測らるゝに、今見れば水莖の跡薄く小さく、さながら女の手のごとし。この人の墓を先つ頃ペーラセーズにて見しことありしが、今思ひ合せられて、感はいよ〱深うなりぬ。そも〱この室には、幾多の見物人も暫し足を止めざるはなく、こゝかしこにさゝやきて、この物どもを評せざるはなし。あはれ時利あらずして、帝の末路涙を以て語らざるべからざるに至りしかども、佛國人民は、蓋し國のあらん限り、帝の偉業を忘れざるべし。

次に最も吾人を驚かしたるものは、大革命大顚覆時代の物品を陳列せる室なり。そが中にもバスチーユ室といふは、革命の初めにバスチーユの城を毀ひたる時の物どもなり。まづ室の中央にバスチーユの城の模型を据ゑ、之を毀壞するさまをあらはせり。四方にはその時用ひし旗、旗鐘鼓甲冑刀劍槍矛鐵格子の類に至るまで、悉く陳列し、更に例のごとく圖してその使用せるさま、本城兵火にかゝれる慘狀をも示したり。

之につゞきては、當時の勇將の肖像をかゝげ、又その親書及び進軍狀、軍用決算帳の類をあつめ、それ〱列ねらる。之を彼の王朝時代に比較し思ふに、誰か身に粟を生ぜざらん。中にも路易十六世の親書を見しこそ、その斷頭臺に曳かれたりけん慘狀さへ思ひやられて憐れなりしか。まことや地圖の室中に、巴里市の古代よりの圖を掲げたりしぞいとも〱見ものなりし。最も古きは殆ど森と川とにして、その中島のあたりに、處々人家を見るのみ。夫より漸次年を逐ひて開け、千五百年代に至りては川の中島は更にもいはず、四方に數多の家ども建てつらねたる、純然たる一都府を成せり。かくて六百七百と數へられ、遂に八百年の今日まで竝べつ

どけられたる、みらかに見てだにいと味ひ多きを、僅かに見くらべなば、いかに利益多からん。さてこの圖どもは孰れもその各時代に成れるものなるが、その書きざまの我が古代地圖と一なるぞ、開けゆく人智の東西同じさまなるも思ひ合せられける。例へば家のごとき木のごとき山のごとき、孰れも横より見れるさまに書きなせる、我が富士見十三州圖、東海道古圖などを見るがごとし。

巴里市の標章に船を用ふることは、誰も知ることなるが、今この古圖を見て、セイヌ川の水すさまじかりし當時を思はれ、更に古代の住民が彼の中島にありて、船にて四方に通ひけんことも掌を指すが如くに悟られぬ。この他陳列の諸品は各時代の廣告札、揭示文、風俗畫、碑碣、市に關係ありし英雄豪傑の遺物及びその肖像、さては陶器遊具等に至るまで、沿革的に列ねられたり。されば一たび此の館に入れば、巴里の歴史は、一目の下に集め見ることを得て、その名の歴史博物館といふに負かず。

さま〴〵の感ども多き中に、彼の奈破翁の偉業と、大革命の事とは、內外人孰れも今更のやうに思はぬはなかるべし。こは言はずもあるべし。たゞ野人をして最も感ぜしめしは、巴里市の全都花のごとくに成れることは、實にこの數年の中に在りしことなり。されば、市の中央たるプラスドラコンコルドのごとき僅に今より四五十年前の圖、及び當時の風俗畫に照らし見る時は、道路のありさま瓦斯燈の工合など、いかなる國の小都府かと思はるゝまでなり。その他、大通りの家屋並木及び道路など、今日より思ひくらぶる時は、眞に都會と僻地との如し。

館を出でゝバスチーユに至る。今は城趾も無く、たゞ大廣きの中央に自由を表せる女神像の大紀念碑あるのみ。高さはエッフエル塔につぎたり。こは誰人も昇ることを聽れば、余も碑の中に仕かけたる二百三十八段の階子によりて進む。銅碑なれば、この頃の暑氣に熱して苦しさ言ふべからず。上層に至れば、市中は眼下にありて百街萬軒たゞ蟻の巢のごとし。風烈しければにや、ゆら〳〵と打ふれば、足の座かゆきやうなれども、高きに上りて人界を見下す心ちいはんかたなし。あはれシャルヽ五世が千とせをかけてこの城を築きし時、いかに巴里市民の爲に燒

きつくされんとは思ひかけけんや、さて思へば、今この見ゆる數萬の人家も、他日またいかなるさまにかかはるらん。

ギメー博物館。　本館は凱旋門の南西プラスデエナに在り。こはエミール、ギメー氏、昨て文部大臣の命に依り、宗教研究の爲に、東洋諸國を遊歷して蒐集せし物品にして、一千八百七十九年に、里昂に於て、初めてその博物館を開きたり。その後追々盛大に赴き、一千八百八十八年に、巴里に移し、遂に國立と爲せるものなり。館内は、埃及印度よりはじめて、支那朝鮮安南暹羅、さては我が日本等の物品を、類を分ちて陳列せり。就中我が國の物は、他の各國に比して、最も多く最も人目を引けり。

一體に宗教に關係せる物の多きは、もとそが爲に蒐集せし故にもあるべけれど、他の博物館にて、容易に見難き貴重の佛體立並びたるは頼母し。さて我が國なるは、如何なる物どもなるかといふに、佛像、武器、陶漆器、繪畫、祭典具やうのものなり。佛像はその數幾千にか上るらん、殆どかぞへ盡すべからず。武器は同じくその數多かれども、あまり上代なるは少し。陶漆器は最も人目を引くものなるが、就中香爐の多きは、殆ど千を以て數ふべし。孰れも絶品にして、今は世界無類のものたり。繪畫は錦繪抔も多し。其の數幾千枚かあらん。その下畫に至るまで、悉く額に仕立てゝ見る人をして容易に筆意を知り得るやうにせるは、感服の外なし。祭典具に至りては、神道と佛道と區別し、物品のみにて解しがたく思はるゝ處々には、大なる油畫にて、その執行せる状をあらはしたり。されば僧侶の讀經する圖、葬禮の圖、神道教導職の說教する圖、齋主祝詞を奏する圖なども、大なる額に仕立て掲げられたり。

この法は、たゞに祭典具の室にのみ用ひしにあらず、武器の室には、大將甲冑を着し、士卒後へに從へる處を人形をつくりて之に裝はしめ、陶漆器の室にては、その製造の順序を同じき方法にて知らしむるやうにせり。

この生人形的陳列の方法は、孰れの博物館にも行はれをる事にて、今更に新らしくいふにも及ばざれども、我が國の物品多き室に入りて、之に接する時は、かのプ

からその感を深くし、中にも江戸の風俗と記して大額掲げたる處などは、一喜一憂他の見物人どもに顔見合されて握らるゝ手の汗は、嬉しきことにのみわき出づるにあらず。

支那朝鮮印度、その他の國々のも、冠婚葬祭の大體をはじめとして、物賣るさま道ゆくさまなど、例の生人形的に陳列せれば、一過して各國文化の程度風俗の良否を知り得べし。嘗てこの博物館の事を聞き及びしかども、かくまでに、東洋諸國の物品集まれりとは思はざりき。ギメー氏の熱心實に驚くべし。かゝれば、今東洋の歴史、東洋の事物を研究せんとする人は、必ず此の館に便ることになれり。

サンゼルマン博物館。　嘗て紀行あり。曰く、サンゼルマンは、巴里を西北に距ること我が五里餘の地なり。住民殆ど一萬七千餘。古へは一の城廓なりしが、今は巴里人の遊歩の處となれり。地最も高く、森林も深ければ、避暑には殊に便なり。一千八百九十九年八月六日、午前九時過ぎ、豫ねて相約せる佛人二名、本邦人一名と共に、サンガザールの停車場より、そなたざまに赴きぬ。けふは日曜日なる上に、殊に暑ければ、人々郊外に行くもの多く、汽車は頗る雜沓せり。余等の室には、初の程は連れの外には、やゝ汗臭き半老人一名のみ乗り込み來りしが、一つ二つと停車場の名數へらるゝ中に、老夫婦の小供を連れたる、若夫婦のさしむかひなる、更に乗り加はりたれば、暑さは一しほましぬ。西洋婦人の常として、行ひに鈍く口に敏なるものなれば、やがて談話は、それ等の間に初まりぬ。彼の野を見たまへ、あれこそ曾て余が遊びしところなれ。かの家の隣りには、愛らしき猫ありしが、今いかになりけん。あれ〳〵車は橋の上にさしかゝりぬ。この川はセイヌなり。彼の船に荷を積みたるさまは、リュクサンブールの博物館の額に似たり。かしこに釣する老人は、能くわが家の門番に似たり。かの岸に立ちて游泳せんとする小兒は、巴里人の避暑に來れるものなるべし。あゝ今は隧道なり。余は隧道を厭ふこと、蛇よりも甚しなど言ひつゞけけるは、若き婦人にして、さはれ若き間の夫婦遊びは、こよなき興なり。隧道の中、必ずしも厭ふべきものにあらずと、口もゆがむまでに大聲あげていへるは、初の半老人なり。ジャトーといへる處にて、彼の頻りに話せる若

き女は、その夫の腕にすがりて降りぬ。かの小供連れなる家族も降りぬ。半老人も降りぬ。残れるは、老夫婦とおのれ等との一むれなり。車は更にすゝみ、やう〳〵高うなりゆく道を、息せきて昇る、いと興あり。

森高く古城聳えたるは、即ちサンゼルマンなり。同行の佛人は、最もこのわたりの地理に明かなれば、こゝかしこ指ざして説きに說く。その昇いよ〳〵高し。車は十一時に近き頃、志すところに着きぬ。停車場は古城の前にあり。暫し休らふ中、ヴェルサイユの方より、黑雲おこりて、雷鳴さへ添ひぬるは、夕立といふものゝ襲ひ來るなるべし。人々眉に皺よすれども甲斐なし。やがて雨は降りそめぬ。雷はいよいよ强うなりぬ。詮無ければ、そのわたりの珈琲店に腰かけて、晴るゝを待つも物うし。時は午にちかづきぬ。腹はへりぬ。雨はやまず。いかにせんなど思ふ中、同行の佛人、かねて用意せる網袋の中なる辨當取り出し、こゝにて食はゞやとて、そのはとくとく並ぶるものは、牛肉鷄肉サンドウイッチ、さては桃葡萄の類なり。即ち給仕人に命じて酒を乞ひ、狹き卓に相連なりて飲み食ふも珍らし。まことやけふは森の中にて、この辨當を開き、足を出し肱を枕にし放言談話して、共に中食を取るべかりしに、雷雨に妨げられたるが、くちをしなどいふにも、腹ははやうふくれたり。雷雨は程なく晴れたれば、立出でゝ先づ古城に至る。この城は十一世紀の頃に建築せられたるものなり。續いて路易九世シャル・五世フランソアー一世顯理四世等かづ〳〵修覆し、又路易十三世は、こゝにて死し、太陽王と稱せし同じく十四世は、こゝにて生れたりといへば、何となく古へなつかしきが多し。この城、今は佛國古代歷史博物館とせられたれば、その陳列の品々目とゞまるもの少からず。石器時代、銅器時代、ゴーロア時代、羅馬進入時代など、順を逐ひて、さま〴〵の物品を陳列せり。中にもゴーロアの穴居のありさま、及びその墓碑碣、さてはそれが用ひし軍器漁獵具裝飾具等は、最もめづらし。例へばゴーリアの首長の墓のごとき、その骸骨のまゝながら、大きなるガラス箱に入れられたるを見るに、甲冑刀劍馬車等に至るまで、併せ葬れるさま、その並べかたの工合まで、能く知られて、數多の陳列品も、彼はかくのごとくに用ひし、これはかやうにせしものといふこと、明か

に悟らる。同行の佛人に、君の體格よりは、この骸骨倔强ならずや、文明の進歩は體を小にして物をよくするにやなど互に言ひつゝ、若し今より數千年の後は、衣服調度は、金銀寶珠にて飾られんも、人は食卓に梯子かけて、飲食するやうに陥るべしなど、笑ひ合ふ。館は前にいひしごとく、歷代の王某々に關係あるものなれども、フランソアー一世、ことに意を用ひしが殘れるにや、壁畫の王冠にF字を記し、更に王家の紀章たる百合の花を畫きたるも味ひあり。建築の古めきて、材木を多く用ひたる、煖爐のことに大なるなど、彼のカルナバレ歷史博物館に似たるもおもしろし。

一通り見了りて、公園に出でぬ。園はこの館よりつゞきたり。例のごとく百花妍を競うて、芝生の青々たる、目も文にすがすがし。見おろす森の多き中に、帶のごとくに流れたるはセイヌ川なり。遙に遠く雲烟の際に聳えたるは、エッフェル塔サクレクール、さては某々の寺院なり。幾百萬の巴里の人家は、將棊の駒のごとくに並び、丘を廻り川を縫ひて走れる汽車汽船は、たゞ鳥の飛ぶがごとし。

三里四方に餘れりといふ大森は、この公園よりつゞきて、人々の最も遊び慰む處なり。大木は樫松の類の苔むしたるが多く、灌木雜草は例のごとくに生ひ繁れり。又我が國にていふ叡山苔裏白などいふものことに多し。ところに入れば、如何なる暑き日も、假に秋の來りたるがごとく、今まで帽子も燒るやうなりしも、忽ち水をそゝぎたるやうなるもうれし。道は自在につけられ、かつ馬及び自轉車等にて運動するに便ならしめたれば、その清きこと甚し。ところの裏白の上には、書生連の畫寫せるあり。かしこの苔の上には、紳士組の酒盛せるあり。木に上りて詩を吟ずるものあり。寫眞器械を持ち來りて、こゝかしこ見めぐるものあり。或は若き女の一隊が、自轉車にて來るあれば、老人夫婦の馬車ながら遊歩せるもあり。

大きなる木の苔むしたるに、佛の像を取りかけ花あまた供へたるを何ぞと問へば、こは我が國にて巡禮といふものと同じく、こゝにも處々の名所をたづね佛ををがみゆくものゝしわざといふ。燈籠さへ備はれるは、そが來るごとに供ふる事と思はる。かゝるもの二つばかり見たり。

夕日のやう〳〵傾くころ更にサンゼルマンの停車場に至る。この度はサンクルーといふに廻はりて巴里に歸ること〻す。こはいたく廻はり道なれども、ゆくかぎり悉く森を見はらして景色よしといへばなり。

實にや車の出づると共に見やらる〻野山の景色いはんかたなし。今まで居りしサンゼルマンの森は、おくりがほに打扮ち、彼の丘この野のめづらしきは、我等のためにつくられたりと見ゆるもおぞましや。野菊のみだれさける、薔薇の處得がほに打靡れる、畑の花園のやうに作りなされたる、佛人の美術心は、この間より賞ひ成さるらんと思はる〻も多し。別莊どもの、かなたこなたの森の中に見えかくれするに、牛羊の群々たる草の上に、打臥せるもおもしろし。葡萄畑の目も及ばぬばかり廣きが、何れも其の丈三四尺なるに、實のふさふさとつきたるも豐かなり。この度は我等の外には、相乘りせる人もなければ、思ふまゝの事ども言ひあひつ〻、燈の見えそむる頃、巴里に歸りつきぬ。

クリュニー博物館。　本館は巴里大學の傍に在り。博物館中最も古建築を以て數へらる。陳列せられたる諸品は、十五世紀より十八世紀に至るまでの物多し。されば、唯其の物の貴重珍奇を賞するに止まらず、歴史上研究の材料として、又最も利すること少からず。その蒐集せる諸品は如何なるものかと云ふに、最も多きは宗敎に關する具なり。さるは木彫石刻の諸像をはじめ、其の祭壇その門扉凡そ十三四世紀以來のもの、大方見られざるはなし。中にも紺紙金泥の經文數多ありて、其の所々に畫を挿入せるが如き、佛敎に用ひたるものと大差なきも面白し。その他ゴブランの古織物に、宗敎畫を織出したるが如きも、亦佛敎にて行はる〻ものと同意なり。

續て多きは、十五六世紀以下の、室内裝飾調度類、婚姻式の用器より初て、一切の道具、沿革的に見るを得べし。曰く手函、曰く硯箱、曰く卓、曰く飲食諸器、曰く寢具何れも古大名の其の財力に任せて、調へしものにて、其贅澤思ひやらるべし。武器室に入れば、甲冑刀劍槍矛旌旗、及び馬具に至るまで、時世を逐て竝べられたれば、一目して之は封建時代の武士の用ひしもの、之は王朝時代の某が某の戰に用ひしも

のなど打見らるゝに當時の有樣手に取るやうなり就中顯理四世の武器の如きは今更の樣に其の威儀さへ忍ばる太刀の長さは六尺以上に餘れるもあり矛の切先數尺に及ぶもありて物凄からぬはあらねど孰れも鑄物なれば鍛錬の功を積み重ねたる日本刀を見馴れし目には猶飽足らぬ心ちす銃器はさま〲ありてさすがに沿革を盡したれども之を今日の進步に比すれば殆ど玩弄物の觀无きにあらず陶器類は最も沿革的に並べられたり大は花瓶大皿を始め小は玩弄物のさゝやけきに至るまで備はらざるはなし人若し能く之を研究せば其の時代々々の特色を見兼ては其の技術のいかに進步せしかをも明に認め得べし

車輿室に入れば十七八世紀頃の馬車及び輦數多並べられたり今日の車駕に比してはいと重々しく不奇用なるは當然なれども其の企儀を盡め裝ひ成したることは我が所謂御所車の比にあらず

又墓石碑碣の類を陳列せる室あり此には十三世紀以下の物あり何の石棺の壯麗にして其の彫刻の念入りたるまた稀に見るものあり其の碑碣類に彫刻せる人物の衣冠時代を逐ひてかはれるを見るに或時は濶袖長袴或時は筒袖開襟遂に今日に移りゆく順序歷々として知らるゝなどおもしろからずやは

又記念章のみを陳列せる室ありこは古代各州の大名の面貌及び各時代の王の面貌等を鐫記せり

かやうの習慣は我が國には古よりあまり見されども歐洲諸國には古今を通じて斯る行はる現今の貨幣及び郵便切手の如き亦然り

又古今各國の履のみを蒐集し及び各種の鍵のみを類別せる室あり履の中には日本の足駄草履雪踏等もまじり見ゆ鍵は最も巧妙なるあり壯麗なるあり彼の某大名のしれわざしけん鍵もとゝに在り此の他古代の天球儀及び諸機器等の一室あり又古裂のみを飾れる室ありこゝには顯理三世の外套及び窓掛ありゴブクンの古きをはじめ惣ての織物の類順よく並べられたり

その最も小さきは帖に張りまはしながら見るやうにせるなど注意至れりと云

ふべし。その權衡度量法のごときは、見る目こそ花やかならざれ、古史を研究せんとおもふ輩などは、決して見遁がすべきものにあらず。

この博物館は、一大庭園を有しそこにはまた古代の彫刻物數多取り並べらる。神像及び獅子狗犬等、その古びて苔むせるさま見る間におのれも古史中の人となる思ひす。また入浴場及び井戸の築造のごとき、そゞろに古を忍ぶくさひならざるはなし。

館中有一珍器、傳云、佛昔某王、臨遠征、爲愛姬有私、設之以鐵陰鎖施之以鍵鑰、其器精巧、極彫鏤之妙、觀者無不掩笑、惜哉逸其王名。　（日　南）

ギアリエク博物館。　本館はトロカデローの邊に在り。建築綺麗にして、しかも大なる庭園を有せり。こはギアリエク公爵夫人の所有なりしを、夫人みづから巴里市に寄附せるものなり。この博物館には、ゴブラン織物及び彫刻調度やうのもの多し。彫刻の事は先にも屢々いひたればいはず。ゴブラン織物とは、佛國美術織物の隨一なるものなり。こは十五世紀の頃ゴブランといふ人、その製造所を創立せるよりおこれる名にして、王代の頃に、殊に保護せられしが、今は國立となりて、世界に名高き製造所とはなれり。

今この館に陳列せられたるものを見るに、古きは千六百年代のものあり。その大なるは横五間縦四間ばかりに渉れるも見ゆ。而してその古きは、その圖大方宗教畫なり。織方といひ、彩色といひ、この道には最も暗き余等も、猶暫しは立ち去ること能はざらしむ。

これらは壁の四方に、高く低く程能く取交ぜて掛けあれば、その室に入りて、つく〳〵と打眺れば、恰もパノラマ館に入りたるが如く、また我もいつしか畫中の人となれるが如し。調度類多かる中には、我が國製と覺ゆるものもまじれり。また支那の瓶などもあまた見えしが、彼の最異彩をして、一層をふるはせまほしく思はるゝもありき。この館はリユクサンブール博物館などに比して、品數は少なかれども、孰れも善盡し美盡し、未だ足疲れずして、その眞を悟るに最も適せり。

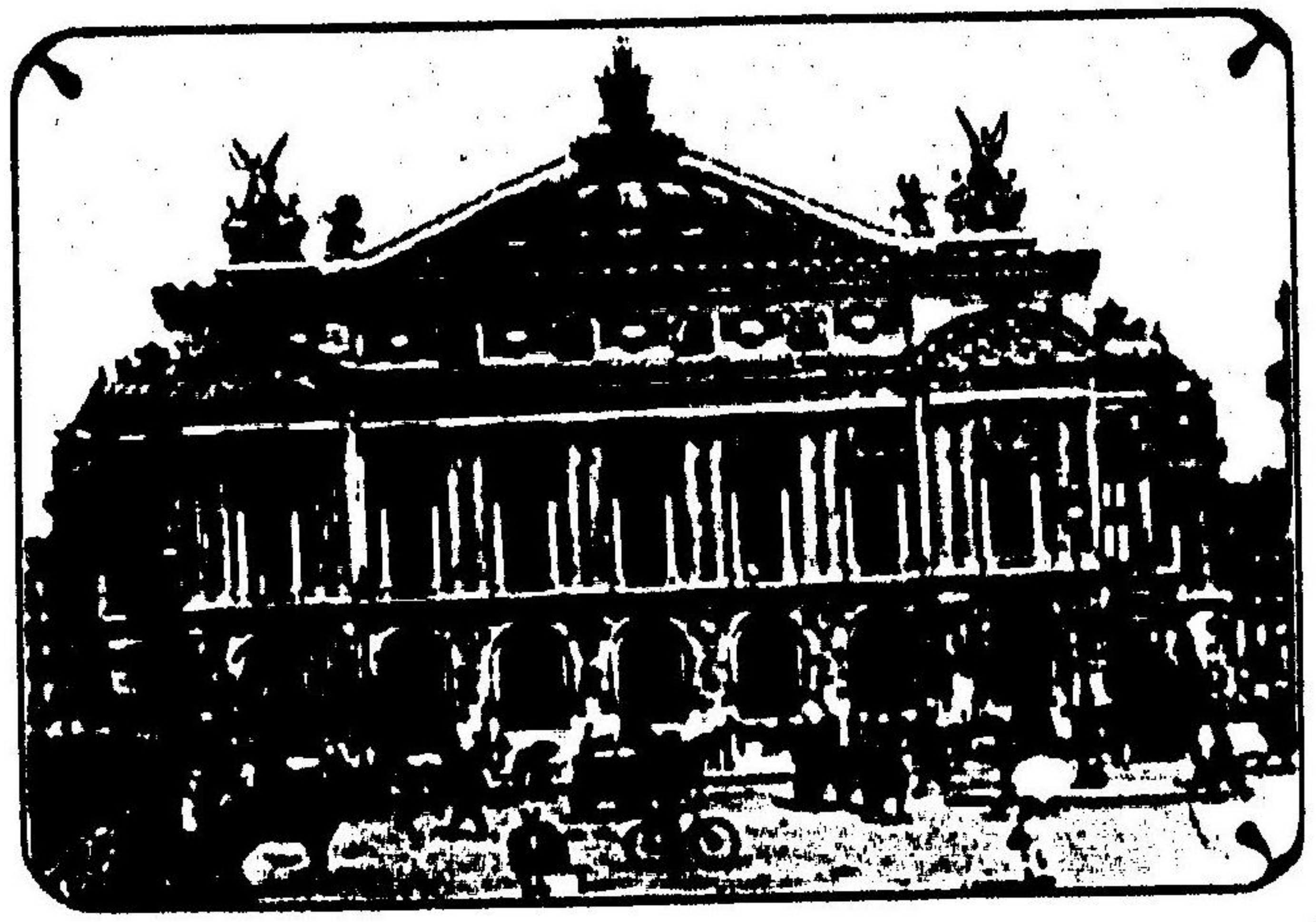
因に云、我が廣島の某寺に、古くわたりしコブラン織物あり。又京都祇園祭の山鉾の中にコブランにて飾れるものありと聞けるは眞なりや。

劇場

國風民俗を觀るは、劇にしくは无く、劇は國民嗜好心の一大鏡面なり、美術文學の競爭場なり。されば一國の文野は、その國の演劇に徵して卜知することを得べきなり。

巴里に於る國立の大劇場をオペラとす。これはもと王公貴族の樂にして、十八世紀の中葉以來伊太利より數多の樂人佛國に來住し、千八百二十八年に音樂唱歌學校の設立と爲り、次で樂器の改良となり、遂にオペラ大館の建築とはなれるなり。こはカルニエー氏の設計にて、千八百六十一年より同七十四年にかけて成就せるものにて、その費用二千七百五十一萬法に上れりと云ふ。建築の面積、一萬一千二百三十七メートルに及び、墺國維納のオペラ、伊國ミランのスカラ、同ナープルのサンカルローの如きも大ならざるにあらねど、この巴里の大館には及ばず。故に佛國人はこれを百年以來稀に見る建築として最も自慢に吹聽せざるはなし。全體は最も精美なる石造にして、奇木異材寶石を以て之を文どり、彫刻には金銀を施し、球玉を飾り、その裝飾の美宮殿といへども企し及ばざるべし。正面には Academie National de Musique の大文字をあらはし、その上には音樂美術の神の彫像を立て、屋の四方もまた彫像を以てこれを廻らせり。この一大美術建築物は、巴里府の最も賑ふ大通りに在り、いはゆる四通八達の衢に位せれば、巴里に入ると同時に耳目を驚さゞるものはあらず。

そのいはゆるオペラは我が國にていふ能樂の一層發達せるもののごとく、問答敍事悉く詩にして、一語たりとも普通の詞を用ひず。最も嚴出に最も壯麗なり。佛國はかの學校卒業生にして最も熟練なるものを採用し、國費を以て之を遇す。こゝにて行ふ劇の種類は多くは歴史的にして、この大劇に至りては、一幕に百人以上を出すことあり。例のジオラマ的なる書き割りに、是等のものども表はれ來れ



オペラ

るさま眞に當時に逢ふがごとし。音樂者は常に六七十人に及び、舞臺の下觀客の前に於て之を合奏す。こゝは大統領も來り臨む事にて、その席は常に設けられ、觀客は男子は燕尾服、婦人は正裝なるを法とせり。我が國にて「昔御能拜見」といふ語ありしが、オペラ拜見の語を以てせば、こゝの一班は想像せらるべし。いふまでもなく此は音樂を主とするものなれば、好オペラ迷は、必ずその奏すべき樂譜を持參してゆくを常とせり。

このオペラの餘りに嚴肅なるより、別にオペラコミックといふもの起れり。これ恰も能に對する狂言のごとし。一體の裝置等はオペラと大差なけれども、何事もやゝ略式にせられたり。これも國立にして現在なるは八十七年の燒災後新たに出來たるものなり。建築はベルニエー氏にして、オペラに比しては、清楚の風あり。壁畫には彼のコクン氏の筆もあり。此にて行ふ劇も全體は、詩なれども、時に言語を用ひ、また諧謔を交ふるとあり。大オペラと相並で今は巴里の雙炎となれり。

テアートル。これ即ち我が國の芝居なり。巴里にては言ふまでもなく、テアートル、フランセー即ちコメディー、フランセーズ座を第一とす。これ國費にて成れるものにてオペラと共に最も世に重せらる。こは昔モリエール時代に創立せられ、益ゝ發達して今に至れるものにて、文學者の最も貴ぶ處たり。現在なるは一昨々年燒失せしを、修覆再建せしものなり。テアートルは、世話物時代物取交にて、絶えて音樂を用ひず。問答悉く普通言語なり。舞臺等の構造はオペラと大差なく、觀客も猶正裝せざるべからず。

又オデオンといふ座あり。フランセー座に次きて有名なり。こは大學の近傍に在

るを以て、學生の觀客割合に多く、價もやゝ廉に、建築裝飾等も、フランセー座に及ばず。然れどもその優は猶資格あるものならでは演ずること能はざるは、フランセー座と異なることとなし、是等を重なる座として、巴里中に凡そ二十座ばかり頂觀せらるゝものあり。

これを我が國に考ふるにオペラは前に言ふごとく、他の外に比較するものなくそれも餘り差ありて彼是と評し合はすること能はず。テアートルは正しく我が劇に當り、そのフランセー座は、東京の歌舞伎座にも比すべく、オデオン座は明治座ともいふべし、こゝに東西その異なる點を擧んに、彼の座には花道なく廻舞臺なし、また音樂なし、床の淨瑠璃なし。その廻舞臺の必要ある時は、全幕悉く火を消し暗黒とし、時の間に舞臺を代ふ。舞臺はジオラマ的に仕組みたれば、我が如く大騷動せずとも直に取替ふることを得。我は幕を横に引通し、彼は中央より左右に釣上ぐ。彼は開幕の合圖に鈴を鳴らし、我は拍子木を叩く。彼は男優女優相交り、我は男優女優に化す。彼の劇は大方夜八時頃より始まりて、十二時に終り、我は終日之を演ず。彼は劇に臨むに、正裝し、我は正寢心の儘にす。彼の劇場は五六階の建築を常とし、我は三四階に及ぶは稀なり。彼は椅子、我は疊。我は茶屋に依て其の場に赴き、彼は切符に依て直入す。我は開場中は巡査之を監督し、彼は騎兵之を警戒す。彼の優は一幕ごとに出でゝ觀客に謝し、我は最終に之を行ふ。是等は彼我風俗習慣の差にて、强て利害を論ずべきにあらず。たゞ彼等の觀劇中に飲酒せず喫烟せず雜談せず、又幕の了るごとに、必ず大運動場に出でゝ歩を伸ばし、靜々粛々として共に樂しむ風あるは欽羨に堪へず。殊にその優に學識あり、その言語詩歌は必ず大文學者の手に成らざるはなく、一語一句章を成して、これを見これを聞く中に文學美術の研究を成し得しむるがごときは、我が未だ及ばざる處なり。又その演ずる擧動に付ても、彼の國民の濃厚殘虐なる性質に拘はらず、頗る淡泊にして水のごときものあるは、我が或は血を流し、腸を出す等の所作よりも大に目安し。たゞ押並べて彼の劇の人情的なるは、我が國人のあまり好まぬ事なるが、これとても我々下等芝居のごとく猥褻なる擧動を爲すはあらず。觀客の全體に渉りて、

互に靜粛を守り、共に他人を妨げざるやうに務る事は、いはゆる公共道德の至れるなるべし。

この他寄席の類あり、同じくテアートルの名の下にあれども、單にコンセル又スペクターグルと唱ふ。こは一町一街に、その設あらざるはなし。小芝居、犬、猿、熊、獅子等諸動物の戯、手踊り、講釈、歌うたひ、手術、足戯、活動寫眞、假聲、遣術、飛び、角力、足踊り、腰踊り、滑稽茶番等、大方かゝる所にて行はる。巴里にては、フォリーヴェルゼール、オランピア、カジノードパリー、フォリーマルユー、ムーランルージュ等、その名高く、その他數の多き事東京の寄席のごとし。是等は時に依りて舞踏場に變る事もあり。その羅甸街に於るビュリエーの舞踏場の如きは數千人を容るべく、飛入勝手に畜生も躍り、下女も狂ふ。そのすさまじさいふべからず。

右やうの處は、夕食後の散歩がてら、遊び慰みに行くもの多く、從つて眞にその藝を見んとするものと、遊興にゆくものとの席を分てるが多し。遊興席は、即ち珈琲酒店となりて、以て飲食すべく、以て雜談すべく以て議論すべく、以て欠伸すべく、以て居睡すべく以て立つべく以て坐すべし。有り合せのコッコット、その性格の如何に拘はらず寄り來り、媚び來て、酒をねだり食を乞ひ、同伴を乞ふ。その無作法、亂行いふべからず。故に紳士淑女は、かゝる處に行くを潔とせざるのみならず、その公開の席又は家庭に於ても、その名稱をだに喋々するを厭へり。然れども歐洲風俗の裏面は、かゝる處に存するを知るべし。

凱旋門

佛國を知るものは、奈破翁大帝を語らざるものなく、大帝を語るものは凱旋門を言はざるはなし。凱旋門は大帝の譽れを表はすと共に、佛國人の精神を宿し氣象を繋ぎ、又同時に世界大建築大彫刻の鏡と仰ぎ見らるゝものなり。

巴里市の大中心となれる、シャンゼリゼーの至り極まる處、東は遙にループル宮殿に對し、西は遠くボアー大公園を見る所に、巖のごとく竈のごとくにしてこの凱旋門は立てられたり。この地をプラスレトアールといふ。これ星の座の意にし

てこゝより十二の町（アヴニュー）を生ず

この門は大帝が墺國オーステルリッツの戰捷の紀念として、建築を初めたるものにて、一千八百六年の起工なるが、その工事中に、大帝の不運となり、成功せしはルイフォリップの朝一千八百三十六年にあり。

門の高さ五十メートル、幅は殆ど四十五メートルに及び、壁の厚さは二十二メートルを數へ、穹窿の下高さ二十九メートルに達せり。二百六十一の階段、その裏にとりつけられ、これに依りて上る時は、或は暗く、或は明く、數十分にして頂上に達するを得。

また門柱には孰れも大帝に關係ある戰爭畫を彫刻し、その裏面には戰死せし將卒の氏名等を彫りつけたり。ブラットホームの處には、鐵鎖をめぐらして車馬の出入を禁ぜり。

伯林を征服せし時、彼のブランドブールの凱旋門上なる戰捷女神像を奪ひ來りて、この門の頂上に据ゑたりしに、後彼の兵に攻入られて、再び持ちかへられたりとぞ。今は頂上には何の設物もなく、只四角なる碁盤のごとし、所ゝに小間物店ありて、大帝に關係あるもの、又この門の寫眞等を賣捌けり。此處に上りて見れば、巴里全市は、たゞ眼中にて、セーヌの流れ、ボアーの森、その絶景なるは云ふも更なり人馬の往來の隙なきさまなど、人の世の營みさへぞ思ひ悟らるゝ。夫につけても大帝が一たびだにこゝに上り能はずして瞑目せるその憤の炎はいかで消る世あらん。エンヴァリードの王冠塔と今は相對して巴里の美觀となれりとぞ。誰もそのこれある所以を思ひめぐらせば、痛歎に堪へざるものあり。佛國たるもの、この大建築を以て、オペラと同じく一の美術觀として遺すに、甘ずるか。噫。

エッフェル塔

巴里に入りて、目につくもの多き中に、誰も打仰がるゝは、エッフェル塔なるべし。こは一千八百八十九年の大博覽會の時に、技師エッフェル氏の建設せるものにて、高さ實に三百メートルに及び、その頂上に更に二十六メートルの燈明臺を揭

ゐたり。全塔鐵材にしてその形蠟燭立のごとく四方に跨れる面積は一萬六千七百メートルにわたれりといふ。

塔身には螺旋形の階段を付したれば、歩しても昇降し得べけれども、別に昇降機を設けて瞬間に上下し得るやうにせり。一階あり、二階あり、三階あり、階ごとに雜貨店あり、寫眞店あり、郵便投入函あり、又料理店あり、其の一階には小劇場さへあり。この塔はセーヌ川の左岸に、トロカデロー宮殿と、水を隔て相對え立てり。即ち彼の大博覽會の場裏に位せり。

米國ワシントンの方尖塔埃及の大ピラミッドといへども、その高さこれには及ばず。現世界中この種の建物にては第一なり。されば巴里に遊ぶものにして、これに上らざるはなし。一階に至れば、馬は犬のごとく、家は箱のごとく、二階に至れば、犬は鼠のごとく、人は虫のごとく、最上階に至れば、寸人豆馬、巴里全市はたゞ箱庭にて、セーヌの水は爪の垢を洗ふにも足らず、ボアーの森は鼻毛にも及ばず。人は常に蝸の相爭ひ、蠅の相戯るゝを嘲り笑へども、此より見る時は、人間の功名富貴また蝸蠅と撰ぶ處なし。エッフェル氏は今に存生し、時々此に上りて飲食すといふ。夜に入りては、彼の燈明臺に火を點せれば、巴里の北辰のやうにて萬人これを目印とし、或る場合には道しるべの標準とみらるゝこともあり。大博覽會開會中は、廻轉電燈を付し、四方を照らさしめしたにあるを、塔身悉く五色の電光を透間无く取り付けたれば、さながら火の柱のごとく、又鱗甲きらめく龍の立てるがごとくなりき。

巴里市にて高きものは、サックレクールの大寺院、ノートルダーム、サンジャック塔、凱旋門、エンヴァリードの塔、グランツール等ありといへども、いづれもエッフェルに及ばず。

　富士かねの裾野をいてゝ行く雲は
　　あしがら山の峯にかゝれり

と縣居翁のよまれしは誰も知る歌なるが、巴里の富士は實にこのエッフェル塔なり。而して是は人造、我は天然。

勸工場

勸工場の必要及び効能は、今更に言ふを要せじ、當市中にてその數多き中に、ボンマルセーと、ループルとは、最もその冠たるものゝごとし、ループルは市の中央なる、いはゆるループル宮の傍に聳え、ボンマルセーはセイヌ川を渡りて南なるやゝ僻地に立てり。二者ともにその建築の宏大なること、我が參謀本部などにも準へつべくや。

余一日はループルに、一日はボンマルセーに往き見しに、春花秋葉の相讓らざるが如く、孰れ劣れりとは見えず。但しボンマルセーのかた、賣る人も買ふ者も何となくはやり立ちたるやうなるは、之をや花になぞらへ、彼をや紅葉によそへつべからん。

飾り立てられたる門をくゞれば、陳列せられたる物品は、目を射るごとくに光れり。曰く金銀時計寶石入小間物曰く文具、曰く遊戯曰く衣服、曰く寢具曰く書籍曰く化粧具、曰く履、曰く家具、曰く食器、曰く人形、曰く造花、曰く旅行具、その數素より測り知るべからず。賣る人は大方女子にして、店ごとに愛嬌をたゝへて、客に低眼を注ぎ、一錢たりとも、その愛宿に投ぜられんことを望めば、必ずしも鼻毛長からずとも、嚢中を傾くる恐れあり。

その品物は、正札を付して、言語に通ぜざる人々にも、たやすく購ひ得らるゝやうにせり。且つ店の並べかたは、それを商賣とせる、即ち陳列專門家ありて、務めて人目を引くやうに飾り立てたれば、おのづから足をひかるゝこと多し。かくて一物を買へば、賣り人は直にその品物の名と、金高とを記したる小札を與ふれば、之を以て更に金錢を取扱ふところにゆき、その小札を示して金を拂ふ。その品物は、自ら持ゆくも、又は跡より屆けさするも自由なり。或は此時その代價を拂ふことゝも、素よりくるしからず。

かゝれば當市の人は更なり、外國人のいまだ物に馴れざるは、此にて買ふが最も利なれば、いつも〳〵その客の多きこと、殆どおどろくべし。六七階もあるべき

各店は、一つとして手を空しくする賣人なく、錦繍綾羅のごとき、殊に目立つ店の前には、人の集まれること、黒山のごとし。螺旋形になれる階を昇りつゝ、下を見おろせば、さながら蟻の行列のごとくなるに、かの店のきら／＼しきと、數多物貨はんとて集まれる婦人の帽子衣服など、互にその美を競へるさながら蝶の花に戯るゝがごとし。その打激れる追風は、高天原に朝して、牽牛織女の眠をも覺めしむべくさへぞ思はるゝ。殊にクリスマス近づきぬれば、數多の遊戯品ども、ことにその美を添へ、且その機械をめぐらし見すれば、人の集まること更に甚し。あるは人形の踊り上るあり、あるは馬車の走れるあり、あるは蒸汽車及び船の疾行せるあり。その他煙龍のめぐれる、兒猿豕などの走れる、ラッパのおのづから鳴りて、兵士の銃を肩にする、自轉車の走れる、さては競馬、闘牛、觀兵式、幼稚園など、或は音樂を奏し、あるは電氣にて色をあらはす如き、到底筆にて寫し能ふべくもあらず。

場内は甚だ廣ければ、所々に札を立てゝ、その出口を敎へあり、若し誤りて之を失ふ時は、容易に出ること能はざるべし。これ勸工場とこそいへ、全く一の小博覽會のごとくなればなり。更に最も人の集まる所は、この店の四方に、やゝ掛ぶるしになりたるものを別に陳列しある所なり。これは色のさめたるもあり、艶のぬけたるもあれば、その價廉なり。一時一刻も流行におくれざるを旨とする巴里人中にも、中以下の人にはさてもあられざるべければ、おしかけおしかけ寄り合ふもの引きもきらず。こゝは布帛類最も多かれば、十中の九分までは女の客なり。それも下女職工など少からざれば、かの悲姑流の亂髮ふりたてゝ、詞もやゝ文字あまりしたるが見ゆ。腰かゞみたる老媼などは、踏にじられやせんと、危くおもはるれど、例の秩序を貴ぶ風習は、かゝる間にもおのづから保たれて、先着のものより買ひとらしむるやうにせるは殊勝なり。

館の一隅に、新聞雜誌の閲覽所及び書記室あり、此處には筆紙墨をも備へ付あれば、何人も隨意に之を使用することを得。切手も此處にて賣り、又その投入函も揭げあり。

又門外には馬車は列を正して、客のかへるを待ち、御者等は早く時のいたらんと

とをあくびす。是等の諸店は、大かた朝は九時より、夕は五時に閉ぢられ、日曜日にはその業を休むを例とせり。

巴里に來て新に一世帶を爲さんと思ふものは、この門を入り、一時間ばかりを費して門を出づれば、資格ある一家を構へ成すことを得べし。さるは一身の裝ひは更なり、鉢植床飾等の具に至るまで、悉く備はり居ればなり。若し又一物をも購はずとも、此の門を出入せば、歐洲最近の流行品は、悉く認識せられ、且その品々の優劣も、おのづから估らるべし。

これに續きては、ベルジャルヂニエー、又サマリテーヌ、プランタンなどいへるが、頗る大なり。ジャルヂニエー及びサマリテーヌは、男女の衣服を主とし、プランタンは、造花の巧妙を以て名あり。但し孰れも、その雜品をも商へるは、言ふまでもなし。これら諸店は、四時のかはりめごとに、その引札を得意先に配ばる習はしなるが、その冊は最も美に、最も新らしく、最も妙に裝ひ成せる、一つの美術雜誌のごとし。それには一々品物を圖解しその價を付しあれば、郵便にて貰ひやれば直ちに届け來るなり。

花のいろ〳〵

春秋に分ちて花のいろ〳〵を賞せしは、何事も天然に打まかせたりけん世の事なり。今は人智進みにすゝみて、珍しとおもふ花は、人爲を以て咲かはすることゝなれば、殆ど花に四季の別をいふ要なきまでに至りぬ。木の花は櫻、梨、桃など、古より早く品定めせしがごとく、こゝにても目につくはこれらの花なり。さはれこは都の中には少し、聊か田舍めきたる所ならでは見られず。中にも林檎の花の、梨の花と白きを爭へるなどいとめづらし。櫻は櫟ざくら多し。ずだれ櫻も、その實を採る爲とかいひてあまた見ゆ。大和心になりぬべしと詠はれけん芳野櫻は、海を隔てたる亞米利加の國にてはやゝもてはやすときけど、未だこの國には來らず。

ムードンの森より、セーヴルの村々をあるきしに、桃の薄赤う咲きつゞきて、その下蔭におのづから放たれたる牛どもの遊へるなど、太平の象とも見らるべし。昔々

れる芝生の目も及ばぬ限り、絨緞などを敷きたるやうなるに、梨、林檎などのいと白きが枝もたわゝにさき匂ひしを見しこそ、旅の愁も打忘られしか。

薔薇の花のめでたきはいふまでもなし。赤き白きさては黄なるなど、その花びらの美しきより、側近うよるまゝに鼻を撲つといふばかりに、香の高きぞうれしき。夜の枕に薫り、誰が袖ふれしなど、この國にてはこの花にぞいふべき。

躑躅の花は、御國より來りしものなれど、今はその育てやう培かふことなど、いと至れるまゝになか／＼に見上げらるゝが多し。霧島さつきなどいふものより、大方の種類あらざるはなし。大なるガラスの家の中に入れられ、五色の薄絹うちおほひて咲かせたるなど、鏡の前に美人の立てるがごとし。この花と菊の花とは兄弟となりて御國より渡り來り、今は孰れもその美を歐羅巴中に擅にせり。

菊の花は、御國にても、いとなづかしきものに數へらるゝが、この國にても、將さるかたに用ひらる。さるは紫の色深う染め出されて、人の心を惱ましつゝ、孀女の帽子の飾などにせらるゝよ。一ふさ二ふさ、その數は百本あまりもあるべきを小さくたばねなして、道の邊に賣りあるくもらうたし、たんぽゝ、釣鐘草などいへる草花の、やゝめづらしきは、大方摘みとられて、男をみなの慰みにせらるゝに、何れも類を分ち、色を文とりて賣り鬻ぐに、いかでかたゞに行き過ぎ得べき。百合花のおぼつかなげにうなだれ咲ける、撫子のあはれなる、いづれも、人の心をひかざるはあらず。これ等の花を賣りひさぐ家は、大方の町には必ず二つ三つと數へられぬはなきに、孰れもガラスを四方の壁とし、あるは鐵を取成しなどして、いと心ちよげに並べあれば、見る人おのづから、我を忘れて、時のうつるを知らざるも多かり。

公園は更にもいはず、大方の道には、所々に小さき庭をつくり、山を築き、池を穿ち、その間々に花を植ゑ成したる、いと心ゆくわざなり。これは彼のモサイック形とかいひて、數多の花を取集めて、一つの模樣を作り成せるもあり、或はわざと一株二株づゝ植ゑ散らして、おのづからなる風景をおもはするもあり。噴水は常に是等の花の上に飛び散れば、そのつや／＼として匂ひ深き立ち離れにくきが少か

からず。

是の花どものいつも〳〵その色などろへず、しかも折々にその取合せのかはる故よしを聞くに、その木の植木屋には三四丁にわたれる暖室を設け、おの〳〵その類を分ちて育て成し、譬へば躑躅のみにて、一丁二丁もつゞきたる暖室あれば、菫のみにて又一大暖室を設けたるなどありて各公園その他の花どもの、一週二週を經て、やゝ見あきたる時には、一夜の中に、新らしき花を持ちゆき、故き花と取替へ植うとぞ。かくてその植替ふるには、考案を要することなれば、その道專門の圖案家を養成する所もありといへり。

かゝれば巴里市中は、いつも花の絶ゆる時なく、花といふ花のさかざるものはなく、人爲にて成し上げられたるものならざるはなし。ある植物博士の草木花卉の類を天然のまゝに打眺め居るほどにては開けたる世とはいふべからずといひしことを今思ひあたりぬ。

菊花展覧會

木々の枯葉やう〳〵散りゆきて、秋色あはれをもよほす頃、菊花の展覧會チユイルリー苑に開かれぬ。至り見れば天幕高う張りわたして、入口には半丁ばかりも人々詰めかけたり。背張りてゆくべくもあらねば、蛇のごとく長く聯なりたる跡につゞきて、蟻の匍ふがごとくに徐々と歩みぬ。かゝること十四五分にして、一フランの關門をくゞれば、鼻を撲つは菊のかをりにして、目に入るは、女どもの帽子の飾の、ゆら〳〵とこの花に擬き合ふさまなり。

花の數よりも多き人の中をゆきゆけば、道は輪のごとくまるくつけられたるに、花はこゝかしこに植ゑつけられたり。この國にても、菊花は日本より來れりといふことを知れるもの多かめれば、けふばかりは例となく背伸びせらるゝやうなるも心ちよし。

植ゑ成したるさまは、我が國とかはらず。務めて花輪を大ならしめんことをはか

れるさまも、よく見えたり。されど我が團子坂などのごとく、この花をもて、人形を作り成せることはなし。また一木に五六百、若くは千輪も咲かするがごとき巧妙なることは更に見えず。大方は楽焼の鉢に植えて、その鉢ながら地に埋め、百若くは二三百鉢にて一山を築き成したり。たとへば、その高き處に白を匿けば、次には赤をもて之を圍み、やう〳〵下りては、紫若くは黄樺などのさま〴〵なるにてあやつれるがごとき仕方にて、日本風なる、こゝかしこに一株二株を分ち竪ふがごときさまはなし。されば遠くよりするも、近よりて見るも、地は少しもあらはれず、全く花にて作れる山なり。

またある處のごときは、その花輪のみをみし〳〵と地にさせるもあり。これらはさながら錦を敷けるがごとく、我國にては、あまり行はれざる風なり。

押並べて丈は低し、葉は付けたれども、我國のごとくよからず。これこゝにては、専ら花をのみ賞して、葉またはその形などには及ばざるが故なり。

花ごとに小札をつけて、歴史的社會的文學的名稱を付したるも、我が國と同じ。たとへば火鼠と名づけられたるものは、その色火のごとくにして、つや〳〵と光りあり。また龍と名づけられたるものは、花びら勇ましく長し。逍遥と名づけられたるは、花の色黒じみて映なし。少マドレヌといふは、白き花の媚びたるなり。その他睦ましき姉妹、勇める男兒など、さま〴〵あり。

この展覽會には、菊花に加ふるに、野菜及び菓物を以てしたれば、その方について珍らしと見とむるものも多かりき。

最も美麗に飾りつけられたるは、梨、林檎、葡萄、櫻實などの類なり。綿を敷きて、その上に一つづゝ並べたるもあれば、皿の上に、四つ五つづゝ盛りなしたるもあり。葡萄のごときは、その莖のまゝに飾りつけたるなど、いと興あり。

野菜は、大根は黒く丸くあるは白く小さく、人參は赤く短く、瓜はその大なるは五六尺ばかりなるもあり。唐がらしは大きさ茄子のごとくして赤く、甘藍、牡丹、蠶豆、菠薐草、さては獨活、青豆、葱、胡桃、榛實の類、我と形を異にしたるが、打並べられたる珍らしからずやは、中に就て、最も目をとゞまりしは、ポチロンといへる、我がカボチ

ヤの形したるものなり。その大なるは、さしわたし三四尺ばかりなるも見ゆ。色赤くして美なり。これは多くはその肉を磨り成して汁と爲し用ふるものなり。

是等陳列塲の外には、運動塲を設けあれば、見飽きたる人はこゝに休らひ、更に入塲することを得。この運動塲には所々に珈琲店を構へ、又音樂隊ありて、常に合奏しあれば、足も氣も更に疲かるゝこととなし。されば三々五々打集ひ、今見し花を批評するもあり、耳をすまして音樂に餘念なきもあり。小供連の家族など、その兒のあぶなげに走り歩くを、額に汗して心配げに追ひゆく老母もあり。艶だちたる夫婦の、むつましげに腕組みあふもあり。一人ボッチの杖を打ふりて淋しげなるもあり。

そも〳〵この展覽會は、例年十一月の初旬九日間を期して、晝夜の別なく開く趣にて、當市人の最もよろこび見るものとぞ。されば會塲は最も鄭重に裝はれ、夜は電燈をもて照すやうに仕掛けあれば、そのきらびやかなること、晝にもまさりて、目かゞやくやうなり。

犬展覽會

並木の青葉蔭ゆかしき頃は、さま〴〵の興行物數多き中に、犬の展覽會といふこと高聲に吠え立てらるゝが珍らしければ往き見ぬ。地はセイヌ川に添ひたるルーブル宮の在るところ、即ちチユイルリー公園の一部なり。

入塲券一人前金二法と記されたる門をすこし高しと小言いふ〳〵くゞりゆけば、數多の犬は、各〻その體を繕ろひ、その聲を文どり、入り來る人々を迎へ顔なり。目錄賣れる店に詣り、そを求めて、一々番號に引き合せ見もてゆくに、日本にては容易に獲らるまじき犬どもぞ多かる。

佛國は更なり、英國、伊國、獨國、露國、白國、瑞國、墺國、その他東邦諸邦に至るまであらゆる國々の犬とも、各〻その類を分ちて、並べ飼はれたり。一頭の犬にて、その國風さへ思ひやらるゝ心ちして面白し。最も大なるは殆ど小牛のごとく、最も小さきは、鼠のごときあり。大なるは大なる小屋に入れ、藁を敷き、鐵柵をめぐらしたれば、

以て寢るべく、以て立つべく、以て歩むべし。彼等が頭は鐵檻より半出るやうになしあれば、彼等はその愛嬌の仕方によりて、如何なる美人にも、その頭を撫でられ得べし。その小さきは殆ど鳥籠のごときに入れられ、蒲團を敷きて坐せるもあり。或は籠の寢臺の上に、心ちよげに眠れるもあり。小さき椅子に凭かゝりて、我を見にと來る人々に、ねだり顔せるもあり。

最も目につきたるは、猪を追ふ犬なり。こは一組三四十頭づゝ、大なる小屋に飼はれたり。こゝにはそを使ふ獵夫も異様なる服裝して、同じく見せものとなれり。こはその種類頗る多く、足の短きあり、胴の長きあり、背の高きあり、又剝製の猪を出して、その追ひゆく狀を成せるもあり。

總じて犬の數は、一千あまりにも及ぶべく、いづれもその性質種類體格を異にしたれば、一つ一つに新らしき心ちして、飽く時なし。されども大別すれば、獵犬及び遊犬(卽ち慰み犬)の二つとなるべし。獵犬はその職務を取らするを第一とすれば、さして飾れるはなし。遊犬に至りては、之をさま〴〵に取裝ひたる、いづれも時々の流行に從へり。或は胴より尻に至るまで、毛を悉く苅り込みたるあり。或は目と鼻との脇を苅り込みたるあり。或は四足を爪の際まで苅り込みたるあり。中には五色の薄絹にて、最も深毛なる頭の毛を、我國にて銀杏返しなどいふごとくに裝ひたるも見ゆれば、全身編ひものせる衣を着せたるも見ゆ。頸輪のごときは、金銀を鏤ばめ、玲瓏を飾り、走るごとに、鈴の音のさや〴〵と鳴るを聞くを樂みとせるなど、思ひの外なり。

足の疲かるゝも忘れて見巡りつゝ、やゝ廣き處に出づれば、大なる音樂堂あり。聞けば、彼の前に云ひし猪狩りの時、犬を使用する喇叭太鼓の類にして、三十人ばかりにて吹奏せる、いと勇まし。是に並びて獵場用の具、數多陳列せられたる中に、輕げなる馬車數輛打据ゑられたる、その氣のきゝたる工合、好獵の人に見せたくぞ思ひし。又別に一大館を設けて、陳列せるを何ぞと見れば、こゝは悉く犬に關する繪畫彫刻及び書籍寫眞等なり。猪狩りの圖、鳥追ふところ、さては犬の歷史、犬の體格など、一見して知らるゝやうにせる、至れりといふべし。書籍のごときは、數百部

積み重ねられたるが、獵犬にかゝれるもの、遊犬にかゝれるもの、さてはそが歴史、そが生理など竝べて犬といふ犬にかゝれることにして、漏れたるはなし。

例のごとく、この館内にも、珈琲店の設けられたるに打休らへば、その器具皆犬に因みあるを用ひたるも面白し。その守衞丁のごときは、胸の鈕釦まで、犬を彫りたるを用ひしめたる、彼の犬公方の江戸の昔も思ひやられぬ。こゝに至りて入場券の小言もいつの間にか忘れて、我ながら犬の知己を得たる心ちせられぬるもをかし。

價を記せるものを見るに、よき犬は一頭五六千法以上のものあり。安きとても五十法以下なるはなし。これはとおもふほどのものは、二三千法ならでは購うどかさんともせず。我國の狆の中にも、二三千法に定められたるを見たり。

市

豆腐屋に三里、酒屋に五里といはるゝ片田舍こそ、市を立てゝ物を賣り買ふ要用はあれ。一たび手を以て招けば、肴屋來り、一たび目くばせすれば、八百屋跪くがごとき都にては、更に市など立つべき要用は無きやうなれども、然らず、商估軒を並ぶる東京にても、猶縁日を待て買ひ物するがごとく、當市にても、人々猶市を待て、物買はんとするもの、多きこそ面白けれ。

東京のいはゆる日本橋の肴市、青物市のごとく、當市殆ど三百萬人の命ともなるべき大市場のことはいはずともよし。臨時に處々に市場を設けて物賣り買ふことのさまざまいと珍らしき。

いつの頃にかありけん、夕ぐれに我が住むあたりを散歩せしが、常に通る人道に、人の腕ほどなる鐵の棒を、縱横にあらく組み立てあり。初のほどは、若者どもの運動を取らんために作り出でたるものと、早合點に思ひつゝ行きしに、凡そ五六十間、若くは七八十間も猶續きたり。疑はいよ〱生じて、翌朝更にゆき見しに、こはいかに、その棒の上には、天幕を張りわたし、よき加減の處に、あまたの棚をつくりて、早く市場と成りかはりぬ。人は黒山のごとく集まれり。見れば、悉く食物を商ふ

ための市なりけり。

牛肉羊肉豚肉の類は猶我が國のごとく、大なるを釣り下げて、その血したゞり見惡きもあり。一斤二斤ばかりに、少さく切りて、皿に盛りたるもあり。鷄肉はその毛をとりて、數多並べられたり。魚類は時によりて、違ふべけれど、いつも多きは鯛、鰈、鮭さては川魚及び貝の類なり。孰れも青葉の上に盛りたり。野菜は大根、人參、菠薐草、牡丹菜、葱、馬鈴薯、ムロン、豌豆などさま〴〵あり。菓物は葡、林檎、栗、胡桃、蜜柑など、これもその種類多かり。

かくて是等を賣るものは、いづれも近きわたりの田舍人なるべく、面ざしやゝ垢染みたるものども、各我が店大事に愛嬌をたゝへたり。

買ひに來る人々は、即ちこの近きに家をもてる人、及び雇はれ居る下女どもにして、その風おもひおもひなり。あるは籠を提げてゆくもあり、網袋をもて來るもあり。押並て下女は總て帽子を頂かず、蓬髪的束髪に、前垂がけなり。その前垂には、いづれも左右にポッケットを縫ひつけ、手巾小錢などにやあらん、ふくるゝばかりに押し込みたれば、步くごとに瘤のごとく動くもをかし。中には煎豆やうのものを入れおき、手を突き込みつゝ三四粒とり出しつゝ、食ひながらゆくもあり。

さて物買ふさまを見るに、多くは正札付なれば、問答も少く、サッサと買ひ、サッサと買ふ。いと敏活なり。されば人の多きわりに混雜少く、物いふ聲もコンピヤンは少くしてメルシイのみぞ多き。

この市には、高帽子天に朝する紳士も、來り買へば、白粉の追風數丁に及ぶ淑女も、來り買ふ。或は夫婦相携へて購ふもあれば、腰かゞみたる老嫗などの杖にすがりて、直たけに肉など購ひゆくも見ゆ。遠くより之を眺めば、蟻の物を引きゆくが如くにて、やゝ文學的にも味はゝるべく、近より見れば、その生計のさまさへ推し測られて、味氣なし。そも〳〵これらの市は、市內所々に、大抵一週間二日ばかりづゝ開かるゝ例にして、午前よりおこりて、二三時頃に終る。終れば、即ちかの鐵棒を取り除け、天幕を卷き、棚の板を一くゝりにし、荷車に積みて、おの〳〵その本におくる。跡は直に水道の水にて洗ひ去れば、道は本のごとく、坦々たるものとなりぬ。

惟ふに、我國中古東西市司ありて、東京、西京の市を司り、その估價を定めたり。彼は毎月十五日以前は東、十五日以後は西とやうに分ちて、京師の民の便利を圖られたり。物語文などに、市にゆきて物買ふさまのあまた見えたるにて、當時のさまは推し測からるゝを、今こゝなるは、さるさまと變りて、更に中以下の人々の爲に、便利を圖れる事とぞおぼゆる。

凡そ人の集まれる處には、かゝる事の行はるゝは、當然ながら、當市のごとき何事も居ながらにして足りゆく所にも、猶この事の行はるゝは、頗る面白からずや。しかもその組立の簡單にして見るが中に之を建て之を除く、その迅なること眞似ぶ甲斐あるべし。

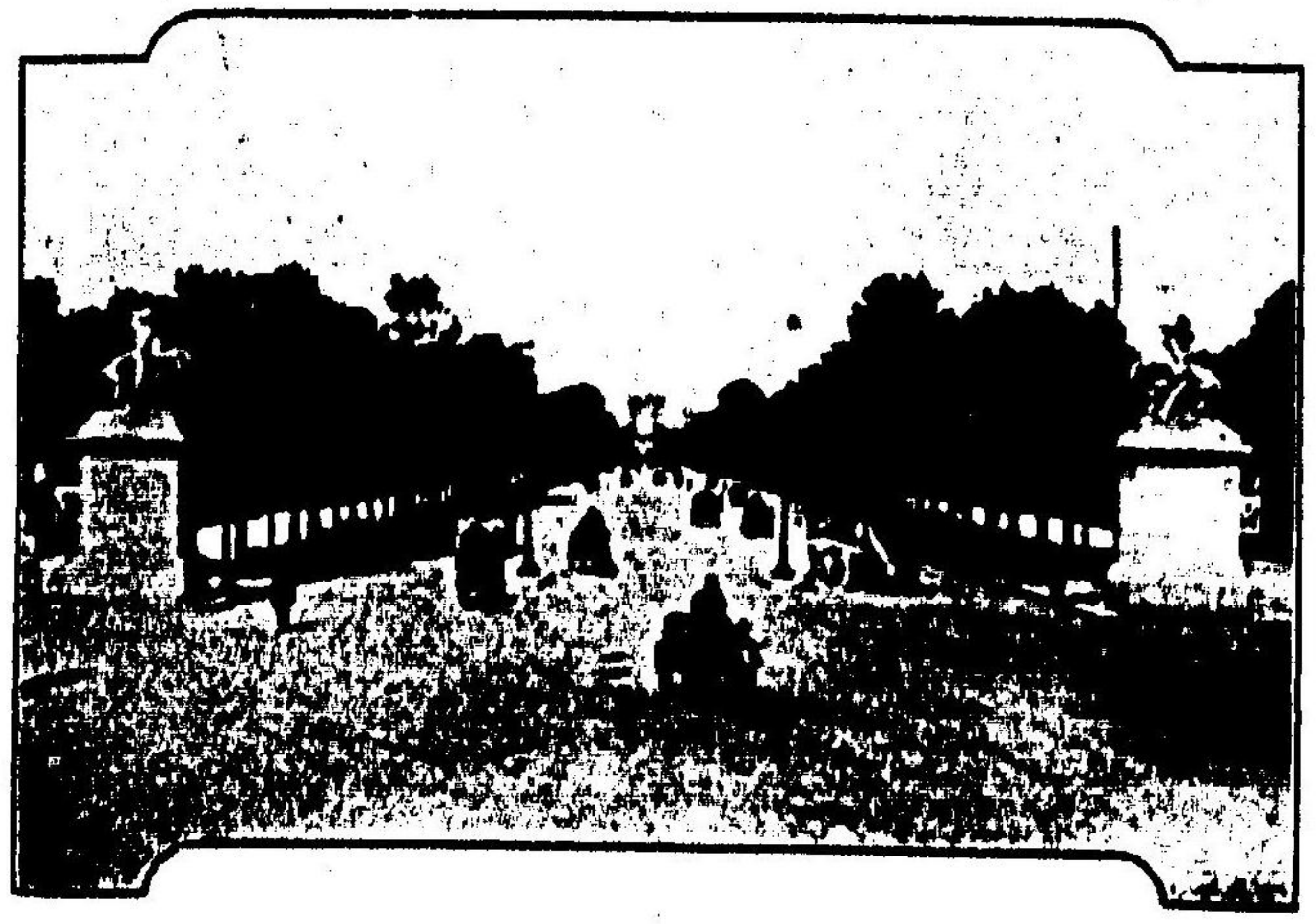
郵便古切手

人類の集まる處、何れの地か物好の行はれざる。物好には有益と無益とを爭ふ暇あるべからず。蘭花一ふさに高金を擲つて喜ぶものも、有益といへば有益にして、無益といへば無益なり。此に最も我々をして驚かしめたるものあり。郵便古切手の市是なり。

古切手を集むるは、一つの物好にして、我が國にても、偶々然る人あれども、こゝにては上下押並べて之を玩ばざるはなし。されば、いづこの町を見ても、この古切手の無き店はあらず、いづこの家の人も、これを集るをもて、一つの物好とせざるはなし。

古切手の相場一覽表もあり、一冊の書籍として、その効能及び各切手の歴史を說明したるもあり、又更に各切手の最も意匠奇炎なるものをのみ集め、例の鮮明なる寫眞板にして賣捌くものもあり、或は各切手をもて器物を取裝ひたるあり、額に作り成したるあり、額ぶちを造れるあり、又殊更にその珍重なるものゝみを貼り交ぜて、一の額として眺むるもあり。

かくの如く、古切手の流行甚だしかればにや、日を定めて、その商人等相集りて、一の市を立て、互に相場を定め、各之を品評し、以て有志の人々に賣捌くことあり。



巴里一等街シャンゼリゼー

シャンゼリゼーといへば、巴里第一等の大通りにしてその幅三百メートルより四百メートルに及ぶ。この道の傍には、花木植ゑ交へられて、殆ど一つの庭園を成せり。又處々に風流なる遊戯店見世物小屋など造り成されて常に、萬衆の慰み處となれり。

或る日曜の朝なりき。この遊園めきたる道を通りしに、群集波をうつごときあり。何事ぞと近づき見れば、かねて聞きつる郵便古切手の市の開かれたるなり。小さき卓を處々に並べ据ゑ、國ごとにその席を分ちて、切手を揃へたるもあり、各國入交にして年代によりて順を立てたるもあり。孰れもその價を付したり。ある人の話に、最も高價なるは一枚何萬法といふもありて、それ等は大抵大蒐集家の所有となりをれり。それは意匠の珍らしきよりも、年代遠く容易に獲がたきものを第一に數ふるとぞ。かゝれば現行のものにても、英獨佛等有名なる國のよりも、反つてアフリカ地方の小邦、さては東洋諸國の交通不便なる處は價高し。故にハツイ小島の古切手のごときは、そのよきは五六千法に價せらるゝもあり。これ物好といへば、一種の物好にして、有徒無益の中に彷徨するものなれども、之に依りて世界各國の在る處を知り、その蒐集したる上にて見れば、文野の別風俗の差さへ認めらるゝ事も少からねば、害なくして利ある玩び物ともいふべし。

この切手を貼用する小本は、各書肆等に賣捌きあり。そはいろ〳〵の類あれども、孰れも國別にして、その初には、その國體の一班を記し、終りには、その國の古よりの切手の雛形をあらはし、又その價格をさへに附記せるもあり。中にも最も鄭寧なるは國ごとに、その地圖を附し、重なる都府の名を擧げ、人口を記し習慣の一班

をかけるもあり、是等は切手を貼用するごとに、之を讀ましめて、一つの地理教育を授るものともいふべし。

我が國從來は、他邦との交通餘りに繁からざりければ、邦人の目には、外國の切手の觸るゝものは少かりしなるべし。然れども、維居年を逐うては、交通の頻繁に赴くは當然にして見馴れざる切手を貼用せられたる郵便物の飛行するも、日を經て多くなりまさるべし。かゝれば言はず語らざる中に、之を蒐集して、物好とするものも出で來べく、從つて當地に流行するごとき、盛況を見るに至らんも知るべからず。余は我が國にて古切手の多くは、古狀袋に貼用せられたるまゝ、反古の中に葬らるゝを惜しむと共に、少年の頭に之を蒐集する習慣を養成することは、花を集め、蟲を集むると同じく、また玩物中に、おのづから地理的思想を養はしむる家庭教育として寧ろ奬勵せんと思ふ。さては小學校の休息室等には、世界各國の郵便電信切手を、國別に貼用したる大額を掲げ置くがごときは、この道を奬勵する一法たらざるべからず。

當地にて、公園など遊歩する中、小供の馳せ來て物いふことを何ぞと問けば、多くは切手の古きをもたば賜はらずやといふことなり。凡そよき小供は切手をねだり、わるき小供は錢をねだる。わるきは素より習ふべくもあらねど、そのよきは取て習ふべきなり。

因に云ふ、洋行する人々は、我が古切手、及び天保錢、文久錢等を所有しをるは、ある場合に交際の愛嬌となりて、便利を與ふることあり。成人のごときは、天保錢一枚を與へし爲に、税關を通ること速かなりしともいひ、成人のごときは文久錢を與へたる爲に、夕食に招れたりしともいふ。税關と夕食とは敢て關する處にあらざれども、招かれて人の家にゆく時の土產などには、頗る氣のきゝたるものなるべし。

奈破翁一世大戰畫館

トロカデロー公園、新樹陰深き處に、王冠形の家聳え立てり。題してパノラマ、ボア

ールボーといふ。ボアールボーとは、畫師の名にして、そのパノラマとなれるものは、奈破翁一世の大戰なり。評判高きまゝに往き見しに、意匠といひ、彩色といひ、はた館の建築といひ、思はず足を止むること數時ならしめたり。

入口やゝ狹くして薄暗きは、パノラマ館の本色として更にいふまでもなし。歩むこと數分、忽ち晝のごとくなりて、まづ目にとゞまるものは、一千七百九十年七月十四日、即ち當國大革命の初シャンドマルスに於て、憲法遵奉の事を誓はんため、諸軍隊會議の狀なり。幾多の軍人の中に、將軍ラファイエットが慷慨事に從へるさまさながら實地を見るがごとし。蓋し奈破翁のおこれるは、革命に原因せればまづこの圖を示しゝもの歟。

是より後は、即ち奈破翁の戰に關するものにして、第一なるはヷアルミーの戰なり。こは一千七百九十二年九月二十日、獨逸兵を擊つところなり。第二圖はヷチーグユーなり。こは一千七百九十三年十月十七日の事にして、澳太利との戰なり。第三圖は一千七百九十三年の憲法會議、第四圖は同じく一千七百九十五年一月、佛國騎兵の和蘭の艦隊に突入するさまにして、氷上を馳せまはるさま、一風かはりて目ざまし。第五圖は一千七百九十八年七月二十一日、埃及なるピラミッドの戰にして、第六圖は同じく一千七百九十九年九月二十五六兩日にわたるジユリックの戰なり。第七圖は一千八百五年十二月二日なる、有名なるオーステリリッツにして、將軍チイが大隊叱咤せるいま、猶耳をうつがごとし。第八圖は是等凱旋の後、巴里チユイルリー宮にて、奈破翁帝諸臣の賀辭を受る、最もきらびやかなるものなり。獻后及び宮女、帝の傍に侍し、文武百官大禮服を裝ひて、打揃へるありさま、いかに得意の時代なりけむ。

是までは階下に掲げられたるジオラマにして、之を見了りて、更に薄くらき階を上れば、一天忽ち明けて、四方百里の平原に出でたるがごとし。眼を凝らして見れば、これぞ此館の最も主とする處にして、帝がイエナに於ける大戰を寫せるものなりける。こは言ふまでもなく、一千八百六年十月四日、獨逸領に入り、大にその兵を靡にせし事なり。平原漠々小村あり、小川あり、小徑あり、佛國騎兵は、何萬を以て

か數へん跡を揃へ砂烟を立てゝ馳せ向へるに、僞兵抵抗し兼ねて、かつ〳〵敗れゆくありさま、かくもありしかと推測らる。彼處の村は兵燹にかゝり、此處の墓塲は破壞せられ、馬斃れ人傷き見るものをして、或は髮を立たしめ、或は涙を呑ましむ。帝は白馬に跨り、諸將を率ゐて、眞先に進めるに、近衛騎兵、之を擁せるなど、げにさこそはありけめ。

さらぬだに此に入りては、當時に在る思ひせらるゝに、館の中央に、殊に陳列せられたるものは何々ぞ。曰く奈破崙帝の軍帽、曰く短銃、曰く頭髮及び皇后ジヨセーフヰーヌ愛子羅馬王の頭髮、曰く襟飾、曰く親書數通、曰く將軍オッシユの劍、曰く將軍クレベールの劍等なり。出品者は悉く侯爵ジラルダン氏なり。軍帽は例の山形にて、露國征伐に用ひし由記されたれば、彼の莫斯科退軍の時まで親しく用ひられしものなり。垢つきて處々破れたるなど、更に當時を追懷すること多し。短銃は二連發にして、襟飾は黑の大なるもの、いづれもセントヘレナに流竄せられし後、用ひられしものにて、英雄の末路を忍ぶに餘りあり。ことにその頭髮を見、その手書を見るに至りては、古今の英傑一身に集る心ちす。

階を下りて更に出口にむかへば、ワアテールローの戰あり。嗚呼一千八百十五年六月十八日、我また言ふところを知らず。館をまはれる新樹露ふかうして、血に啼く杜鵑は、エンペラードなる帝の陵墓をさして飛べり。

巴里の朝(夏)

「寢んとすれば明るむしのゝめなどいひて、夏の夜の明け安きは、御國も同じことながら、この國にては、その短きこと殆ど目たゝくばかりなるぞ、さまかはりて面白き。この七月ばかりは日の入りは午後八時五六十分にして、夜の明るは午前三時半なり。さるにこゝの習慣として、午前二時三時頃までは、いはゆる夜なべする家多ければ、いぬるは眞に暫く間なり。然れども人として一晝夜を通じて、僅に二三時間睡眠して、事業に從ひ得らるべきものならねば、おのづから朝寢の習慣を生じ來れるも故あり。